

日蓮宗河合大僧正題字 日蓮宗風間權大僧正題字 日蓮宗大學教授北尾日大先生編著

聖誕七百

紀念出版

日蓮宗法要式

紫羽二重 七百頁
金文字入 七拾錢
正價金 參圓五拾錢
特價金 參圓十二錢

日蓮宗日蓮主義の實踐的方面に於ては信行を根本とす。而して信行の要は朝夕の勤行及び月次年次等の法要儀式を勵行するを以て第一とす。然るに古來完全なる法要信行の書無し、著者之を慨すること十年、苦心研鑽の結果本書を著して此缺陷を補はんとす。第一篇常時法式には日課、週次、月次、年中の諸式を掲げ、第二篇特種法式には禮法華會、施餓鬼會、放生會、祈禱經、改宗式、得度式、晉山式、結婚式、葬儀等の諸式を示し、第三篇諸回向文には四十餘種を列ね、第四篇法華要品には二十品を載せ、第五篇信行要文には經前誦、歎德、奉告、祝辭、帛祭文、七十餘例を擧げ、且つ附するに改名字選を以てす。凡そ本化信行法式の各方面を網羅收録して遺憾あることなし。願くば五千の住職者諸師、二百萬の信徒諸氏、五百の學生諸君乃至一般日蓮主義讀者諸君、奮て一本を座右に備へられ、以て信仰の正軌、法式の指針に充てられんことを。

五大特色

- 一、本化組織宗學の見地よりして諸種の法要儀式を最善に分類し整束し且つ統一あらしめたる點。
- 二、法要信行に必要な法華要品圖書要文を編入して如何なる法式にも此一冊にて事足る様至極便利に編輯したる點。
- 三、年中行事三十八種特種法式三十餘種等の下一々に適當なる御書を選抜配合して日蓮主義を法式上に發揮したる點。
- 四、日課月次年次等の重要法式を一々具體的に羅列し以て實用に適切ならしめたる點。
- 五、革正的方面の新式も實行に適し傳統の方面の古式も亦非宗教ならざる様特に注意を拂ひたる點。

發行所

京都市東洞院三條上ル
振替大阪一三〇六五番

平樂寺書店

目次

| | |
|------------------------|------|
| 法華經の眞價……(其二)…… | 本多日生 |
| 國民性に就て……(其二)…… | 武田顯龍 |
| 淨土教と厭世思想……(續)…… | 森川日修 |
| 日蓮主義より見たる無量義經……(第六回)…… | 井村日威 |
| 少年……欄…… | |
| 記事報道十數件…… | |

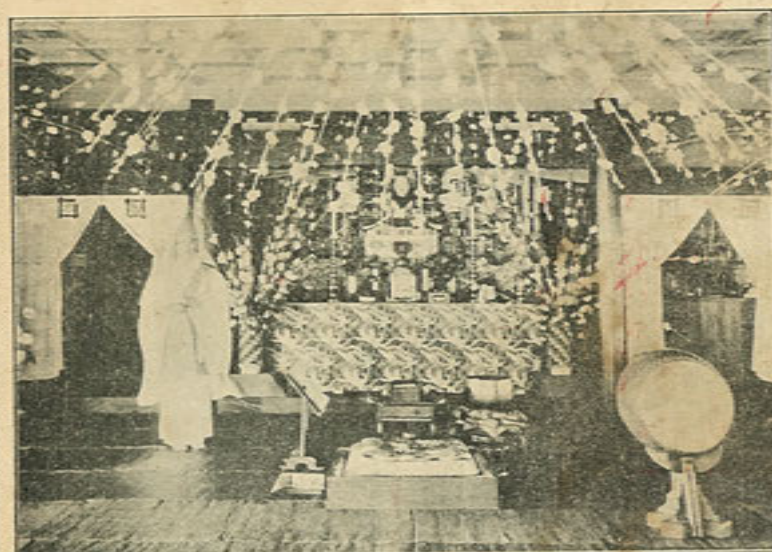
| | |
|--------------|------|
| 法華經要文講義(續)…… | 本多日生 |
| 那先比丘經通解(續)…… | 本多日生 |

第廿六年十二月號

統

南日本に於ける新勢力

東京府小笠原父島法蓮寺



法華經の眞價 (二)

本多日生

一 統

歐米諸國では改造を叫んで様々に言つて居るけれども、精神的文明に復らなければならぬと云ふ自覺に至つた時、如何なる精神的文明に戻るべきかと云ふ事に就て、鼻をつくののである。精神的文明に復らなければならぬと云ふ自覺は起つたが、その戻る精神文化の標的がない。どうしても精神的文明に戻らなければ、この混亂、この失望、このあさましき悩みを、脱れることが出来ない、どうしたら宜いか。どうしても精神的文明を重んじて、人間に正しい理想を與へ、人間に温かなる精神を復活して行かなければならぬと云ふ事を自覺して、如何にして正しい理想を與へ、如何にしてその温き精神が生れるかと云ふことになつて來た時は、仕方がないから舊來あつた宗教に戻らうとする者もあるけれども、こゝ迄進んで來たる學問や知識、こゝ迄發達して來た文化が、舊來の宗教に満足しない。精神文化に戻らなければな



らぬけれども、過去の精神文化では不十分であると云ふので改造を唱ふることになる。造り替へなければならぬけれども、造り替へる材料が無い。この家はもう住んで居ることが出来ないから建替へなければならぬが、木造にしようか煉瓦造りにしようか、どつちもいかな、何を以て材料に當てるかと云ふ、その材料の發見に歐米人は大騒ぎして居るのである。所が幾ら探して見た所で、是は大きな問題であるから、なか／＼さう何處にでもそれに間に合ふやうな思想があると云ふものではない。法華經に説いてあるやうな事は誰でも言へさうなものであるけれども、法華經のやうな思想はなか／＼發見されない。色々の學問をやつても發見されない。法華經的精神は法華經を通して之に觸れなければ、この潤大なる精神に達することは出来得ないのである。そこ

に私は法華經の偉大な價値があると思ふ。法華經はこの意味に於て、現實の生活と理想の生活との兩方面よりして、直接人生に完全なる満足と與へる所のものである。この點に於て將來に眞價を發揮するであらう。

更にその意味合を他の方面から觀察をして參りますると、是は知識の満足、又情緒の満足とても云ふべきものであつて、學問や知識の方から来る満足と、宗教や道德の方から来る所の満足の二つである。強いて分けければ三つて宗教と哲學と道德でありま。人間の精神と云ふものは、哲學的思想の満足を得ること、道德的の善を作さんとする希望を満足すること、宗教的の淨き温き情懷を満足することの三つであるが。それが現れて哲學となり道德となり宗教となつて居る。この三つが人心を支配して居る

限りは決して文明は破壊されない。哲學が人心を指導して居る間は決して物質偏傾の文明とはならない。道德が人心を支配するだけの權威を持つて居るならば、是れ亦社會は破壊されない。所が歐米の文明は、哲學も名前のみにして段々實證哲學となり、科學となつて、今日は物質の問題となつて、哲學の本領であつた高遠な所を振捨て、實證の範圍に這入つて居る。それで哲學の名はあるけれども、純正の意味に於ての哲學は無い。名前だけはあつたが、哲學の哲學たる所以は無くなつて居る。墮落したる哲學、淺薄なる哲學となつて居る。道德もその通り、個人主義とか自然主義の道德となつて、嚴密なる意味に於ける道德は捨て居る。之も道德の名前はあつても實の物だけが残つて居る。藝術と云ふものも、私はその方は全然素人でありませうけれども、藝術の

微妙なる所と云ふものは、人をして道德的美點を發揮せしむるとか普通の場合に於て現れて來ない所の人間の美點を藝術を通して引出し發揚せしむる所に妙味があるものでないかと思ふ。それが墮落してしまつて、文學であらうが小説であらうが劇であらうが、總て低級なるものになつてしまつて、藝術の藝術たる所以は全く滅びて、墮落したる藝術が今日に残つて居るのであらう。又宗教としても、その宗教の本領は、絶對なる方面に於て活動の精神を存して、如何なる人生の苦痛が生じても、宗教の法悦に依つて之を打拂ひ、卑しき欲望が起りても、この高潔なる精神に依つて撃退して、信仰の慰めに依つて進んで行く所に、宗教は人間を救ふ力がある。その宗教の宗教たる本領が滅びてしまつて、宗教の附屬事業であつたものが、宗教の本領の如くになつて

來て居る。西洋はその點に於ては進歩と云ふけれども、法華經の理想から判斷すれば、哲學は哲學の本領を失つて墮落し、道德は道德の生命たる所を失つて墮落して居る、宗教もさうである、藝術もさうである。その點に於ては西洋文明は、非常にあさましき道を辿つて居る。それを見て日本人は、西洋の文明は進んで居ると言ふけれども、それは暗愚な觀察である。今日の小説や文學や、あゝ云ふものの中には、到底吾々の希望を繋ぐべき文明があるとは思はれない。それ故に法華經の方から考へれば、哲學としての權威はどこ迄も之を維持して、失ふことはない。般若經の哲學思想とか、華嚴經の哲學思想は破られる所があつても、法華經の一念三千の哲學思想は、未だ學界に於ても破られたことを知らない。寧ろその方に向つて進みつゝあることが認められ

る。オイケンの生命哲學の如きも、宇宙の大生命を説くと云ふやうなことは、一念三千の初歩を發見して悦んで居るものである。又西洋哲學が現象實在と云ふことを以て誇りとして居るが、さう云ふ事は諸法實相、即ち妙法と云ふ言葉を以て、宇宙の現象と本體との關係を明かにして居る、世間の相は常住なりと説いて法華經に於ては明白に説明されて居る。法華經に説きつゝある所の諸法實相とか一念三千とか云ふことは、西洋の哲學者に於ても反對することは出来ないことである。墮落したる哲學は、名は哲學であるけれどもそれは眞の哲學ではない。哲學の哲學たる所の、高遠なる宇宙の玄妙なる狀態に就ては、法華經に於て教へたものは破れることはない。將來とても破れるものではない。説明の方式は人々に分らす爲めであるから、そこに多少紹介の仕

方は變つても、結論に於ては動くものではない。道德の問題に就ても、法華經に於て教へて居る菩薩行と云ふものは、是は動かぬと思ふ。大體法華經は、一切衆生の人格の上に於て佛性を認めて來たものである。道德の基礎と云ふものは、一方には自己に就ての絶對の價值を認めて來ることが原理である。儒教に於ては明德とか性善と稱して居る。西洋の學問では自我實現と云つて居るが、その説明が完全して居るならば宜いが、人間の本能は劣等なるものとして、色慾とか食慾と云ふものを本能と解釋して居る、それでは墮落の人となつて之を復活する力はない、それではいけない。人間には佛性があり明德があると云ふことを發揮しなければならぬ。劣等なる方面と云ふものは是は從屬性である、所謂本然の性は立派なものであると云ふことは考へて來なければなら

ぬ。ただ、西洋は考へ足らぬのである。それには色々な事情もあるだらう。西洋の宗教が人間の本性を研究せずして起つたものであるから、神が造つたと云ふやうなことを云つて、蛇に瞞されたとか、基督が磔になつた事に於て人が救はるとか言つて居つたので人間の本性に就ては研究して居らない。所が佛敎はさう云ふものでない、自己の眞價を開發すること至れり盡せりである。多くの佛典に於て心を研究して居ることは、非常に精細を極めて居るのであります。その説明の完成したものが法華經にあるのである、それが法華經の佛性論として現はれ、菩薩行として現はれて居る。それであるからどう云ふ人でも上には無限の向上を辿つて、一切衆生はどう云ふものでも極點にまで上らうとして居るものであると云ふことを説いて居るのであります。それ故

に、惡人も惡人て満足して居らない、必ずや成佛する、女人も成佛すると云ふことを以て、總てを絶對の境遇に上るべき目標に導き、上に向つては菩提に至るべき發心を促し、下には總ての憐れなものを救ふべき慈悲の行ひに導き、菩薩たれよ、菩薩たらざるべからずと云つて、「我れ深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて當に成佛することを得べし」と佛に成れる身の上であるから決して輕蔑しないと云ふ、この精神と云ふものは動かぬのである。人間は今申すが如く、如何なる者でも、憐れな者、落ぶれたる者でも、最早一人の顧みる者なくして、橋の下に凍えて居るやうな者に、息のある限りは佛性を失はぬ、そこに道德の根柢があるのである。今日はその大事な所を忘れて居る、肝腎な所を落して居るから、碌なものが出て來

る筈がない。一番良いものを棄て、居るのであるから、幾ら探しても良いものは出て來ない。デモクラシーだと言つて騒いで見た所が、道德の大本を忘れて、自己の權利を主張するのみでは、眞のデモクラシーの精神は現れない、一切のものに悉く佛性があると云ふことを認めざる限り駄目である、個人主義と云ふものは、その人格を基礎にしなければ個人主義の妙味は出て來ない。西洋の個人主義は色々變遷があるけれども、土臺が壓迫に對抗して考へ付いたものであるから、出發點が違つて居る。東洋は大慈悲大悲の心から全宇宙を達觀し、又人生を諦觀したる所のものであるから、その出發點が違ふ、それであるから道德の根柢に於ても法華經の方は動かぬと思ふ。

宗教としては全く動かぬ、世界の總ての宗教は動

くであらう、世界の總ての宗教は破産するであらう、けれども法華經のみは残る。只今申す通り哲學上の基礎に於ても道德上の基礎に於ても光り輝くものを持つて居るのが法華經である、況んや宗教に就ては模範的のものである。

宗教の本質は宇宙の實相を説くこと、吾々の眞實を説くこと、佛の眞實を説くことである。吾々の信すべき絶對の大人格者の眞實を説くこと、是が基督教の神よりも法華經の本佛は非常に立派に現れて居る。それは一神主義と統一神主義との違ひを考へて見れば分る。基督教の一神主義のやうな、獨りだけ神であつて、他の者は神になれない、獨りだけ偉いもので他の者は偉いものになれないと云ふ事はどうして信ぜられるか。さうして下の方でデモクラシーと言つても、天に上れば頭を仰へ付けられる、

る。又道德に於ても、菩薩行の思想が十分に研究されるべきものであると思ふ。この意味から言へば今日は愉快な時代である、眞御勝負の時代である。耶蘇教國と云つても、耶蘇教に嚮り付いて居るものではない。道德上から哲學上から文學上から、基督教は既に裏切られて居る、色々の手段を講じて餘喘を保つて居ると云つて宜い。又佛教が今復活しないと云ふのも、法華經の主義を採用しない爲めである。空々寂々を止めて、もつと活躍する方に覺えたら宜い、それを死てるのか生きてるのか分らないやうなものを、それが佛教でござると言つて居るから世人が相手にしない。眞の良いものは古い新らしひでなく眞實である。過去と云はず未來と云はず、眞實なるものを保護して不眞實なるものを撲滅すると云ふことに盡さなければならぬ。その時に法華經は眞實な

るものとして残る。一つて宜しい、他のものは要らない。神や佛の觀念に於て、吾々の進歩したる理想を繋ぐに足るべきものは一つて宜しい、絶對の神であるならばその活動は無限でなければならぬ、全智全能であるならばもつと無限に活躍しなければならぬ、唯だちつとして居つて、何もかも見て居る知つて居ると云ふだけで、働くことがなかつたならば全能ではない。基督教の神は不能である、法華經の佛にして始めて全能である。法華經の佛は三世十方に大活躍する無限の全能である。この思想は何れの國に於ても、その國の在來の神佛を或る程度まで認め、之と融合する、釋迦が婆羅門の梵天帝釋を認めたが如くである。それが耶蘇教の教であつたならば、その國に於て行はれた教、或はその國の尊敬物を破壊しなければならぬ、日本に來れば日本の敬神の觀念

を棄てなければ、基督教の教は徹底しない、さう云ふものは文化を攪亂するものである、或る意味に於ての破壊者である。基督教は過去に於て猶太教を破壊したのである。日本人を異教の國民とか野蠻人と云つて居るのは、基督教の神を信じない點に於て野蠻と云つて居るのである。東洋の文明は、何と言つてもそれを認められない、それは日本人が歴史的に日本の國自慢で認めないのではない、東洋の哲學、東洋の知識が認めないのである。日本人にして彼等の神を信じ得るのは、東洋の知識を欠いて居るからである。色々な事情からして基督教に這入つた人が多いので、若い時分から佛教を聞いて居るならば、基督教へは行かぬのであるが、何も知らないから基督教に這入るので、今になつて考へて見るとあゝ云ふものに行くのではなかつたが、今更仕方がないと云

ふ位のこと、正直の所そんなものである。基督教の教、基督教の神に満足されるのは、東洋の哲學を理解しないからである。吾々は基督教なるが故に攻撃するのはない、この點は、眞理として東洋の佛教の眞理は基督教の眞理より高いからである。是は如何に説いても差支ない。西洋人の中にもさう云ふ觀念を持つて居つた人が出て來たので、慶應大學の教授をして居つたアーサーロイドと云ふ人、この人は新基督教の名に於て、壽量品の本佛のやうに基督教の神を説かなければならぬ。一神を固定的に見て働かぬのは古い基督教である、今後百年二百年の後には新基督教が現れるそれが眞正なる基督教であると云はれたさうであります。基督教界に偉人があつたならば、基督教の神の働をもつと廣い意味に説いて、日本の神々も是は人以上に尊いものであると云

ふことを認めなければならぬ。然るに基督教は、總て其等の神々でも人と同じものである、アダムイヴのやり損ひの罪の責任を負うた罪惡の人としてより見る事が出来ない、さうして日本を固陋と言つて居る、どつちが固陋か分らない。私は、基督教界に傳教弘法の如き偉人があれば、もう少し分ると思ふけれども、割合に東洋の文明に對して無理解の人が多いやうであります。一神主義が絶対真理のやうに思つて心酔して居るけれども、將來の文明に於ては必ずや勢力を失ふべきものであると思ふ。それ故に法華經は、哲學の眞理から見ても、道德の意義から見ても、又宗教の本質から見ても、實に完全なるものである。而して現在の偏傾して居る文明が目覺めて、そこに信仰を求め來る時に、それを導くものは法華經である。誰かさう云ふ哲學を發見する學者が

出て來るだらう、宗教が出て來るだらうと云ふのは夢である、法華經の如き、偉人釋迦に依つて開かれ、又長き歴史を以て發達して來た所の、哲學的にも道德的にも又宗教的にも偉大なるこの法華經に依つて進んで行くと云ふことは宜いけれども、今新らしくさう云ふものを造らうとしても、その人を得ないし、決して今日新たに大宗教が起るべきものでない。大本教が起つたぢやないかと言ふかも知れぬが、大本教は新しいものではない。日本の神様に依つて行くと云ふのであつて、兎に角新しいものではない。天理教と云つてもさうである。あゝ云ふものは新しいことは一つもない。それであるからして今日宗教が復活をするに就ては、どうしても一つ據り所が無くてはならぬと云ふことになつて、基督教はバイブルに依つてその眞價が判斷される、佛教はその經

典に依つて判斷される。その時に法華經と云ふ偉大なる經典があることは、非常に力強い。幸に佛教には偉大なる法華經がある、是は坊主が偉いのではない、今のやうに坊主が腐つて居るから法華經も腐つて居ると云ふやうなことを思ふのは間違つて居る、耶蘇の坊さんが偉さうであるから耶蘇教の神が偉いと云ふ、さう云ふものではない、耶蘇教はバイブルに依つてその眞價が判斷されるのである。バイブルに依つて判斷せられたる耶蘇教の眞價はさう大したものではない、到底法華經に比すべくもない。併しその法華經の闊浮提に流布するのは、唯だ人間が賢明になる度合の問題、時間の問題であります。人間が永遠に暗愚であつたならば、法華經は世に出ない、賢明になつたら現れる。法華經を信じない者は或る意味に於て暗愚である、法華經が會得されないやう

な人の宗教論は粗末なものである。

今までお話ししたのは、法華經と他の經、又他の宗教と比較してお話したのでありますけれども、法華經は一方には總ての思想を包容して、それを開顯して行くと云ふ進取的の働を持つて居る。そこに法華經の尊とい所があると思ふ。進取的と言つても今の人の叫ぶやうなことを云ふのではない、法華經の精神、その原理を以て他の思想を見て行く時に、その思想が活躍して行くのであります。例へば東洋文明の儒教と法華經との關係を考へた時に、天道明德の教でも仁義忠孝の教でも、大學中庸論語等にあらる所の事は、法華經と一致する。法華經の思想を會得して、法華經の思想を文明の基本に置いてそれからして見る時に、之等の儒教の書物が皆活躍するのである。それは私が法華經を信するが故に言ふの

ではない、それが眞理である。儒教に於ては明德と
ぼんやり云つて居る、法華經では佛性と云つて居る、
さうしてその佛性の研究が精細で且つ整うて居る。
彼は天道と云ふけれども、我は本佛と云つて居る、
さうしてそれを組織立つて説明して居るのは法華經
である。總ての問題がさう云ふ具合であつて、法華
經は總てを活躍せしむる所の教である、神道でもさ
うである、神道は雜りがなくて宜からうと言ふ人が
あるが、それはいけない、それだけでは足りないの
である。今日の文明は最早純神道として誇つて居る
やうな、そんな頭では駄目である。何故かと言へば、
日本の文明發展進歩して行くのである、純神道と云
ふと、建國の初めの素朴の文明に固著して、三歳の
子供がいつ迄經つても三歳で居るやうなものであ
る。それであるから、發達進歩して行く神道である

ならば、矢張法華經的理想で、神道の中に包含され
て居つた精神が開發されて進んで行くことと云ふこと
なければならぬ、さうして總ての文化を吸收し攝取
し同化して發展して行かなければならぬ、それには
法華經的精神が純神道を開顯して之と調和して行か
なければ發展が出来ない、それとなければ思想の研
究としては説明が付かない。それを純神道は純神道
として置いたならば穢れがなくて宜いと云ふやうな
頭では駄目である。發達すべきものを發達させるの
は穢れてない、傳教大師でも日蓮聖人でも、法華經
を以て神道を開發せられたものである。元來が日本
の文明の根本に戻つて考へて見ても、初めは文字も
無く經典も無かつたのであるから、法華經の思想な
どが根本から關係を持つて居るのである。純粹と云
ふそこに初めから法華經のやうな思想が關係を持つ

て居つたものであると云ふことを忘れてはならぬと
思ふ、途中から這入つて來たやうに思ふのは間違つ
て居る。左様な譯であるから、儒教でも神道でも、
法華經を以て開顯して、その他人生に必須なる總て
の事柄と法華經との調和を取らなければならぬ。日
蓮の言葉を藉りて言へば、立正安國、法華經を立て
ゝ國家の發達を圖る、一天四海皆歸妙法、この法華
經の弘まる所に人類の幸福を齎らす、宮仕を法華經
と思し召せ、世法は總て佛法である。法華を識るも
のは世法を得べきか、法華經を知ることは實際生活
を理解することであると云ふ位にまで云つて居
る。それであるから、精神生活の色々な思想をも開
顯し、物質生活のことも開顯し、總て役立つものは
悉く之を活躍せしめる、勇將一たび起つて指揮する
時は、弱卒と雖も強兵となる、如何に豪勇なる部下

と雖も、智勇無き大將を戴いた時には、強き働が
出て來ない。恰度この間まで波蘭が露西亞のゲオル
シエビキの爲めに驅逐せられて、波蘭は殆んど亡
國に瀕して居つた、所がそれは容易ならぬと云ふ
ので佛蘭西の方から將官を遣つて之を援助した
所が、戰の勢はまるさう正反對になつて今日で
は露西亞は驅逐されて居る、それが爲めに露西亞の
勞農政府は危ないと云ふ位である。それは唯だ參謀
が代つただけで他の兵卒は前と同じである。それと
同じで根本の大理想を法華經に依つて押へて行か
なければならぬ。一國の文化には左様な偉大なる基礎
が無くてはならぬ。哲學無き國家は滅ぶる、健全な
る宗教無き國家は滅ぶる、道德の軌範を失へる國家
は滅ぶると云ふは、是は明白なことである。人類に
してもさうである、哲學を失うた時、人類の幸福を

失ふ、宗教を棄てたる時、人類は破壊に了る、是は争ふべからざる眞理である。その場合に於て、只今申したやうに健全なる宗教、哲學、道徳が法華經に依つて大本が示されると云ふ事になれば、眞に絶大の價値を法華經が持つのである。さうして有らゆる思想を開顯して行つたならば、害を與へし所のものが益を與へるやうになる、弱かりしものが強くなる、と云ふ事になれば、是程偉大なる事はないと思ふ。それ故に法華經が、最初申したやうに精神生活、物質生活の兩方面を調節した所の大思想であり、その精神生活の内面を哲學道徳宗教として見た場合には、完全なるものである、さうして他と比較したる時に卓越して居るのは勿論、それが同時に開顯の思想に依つて他のものを復活せしめて來る時には、恰度勇將の下に弱卒が無いが如くに、總ての精神文化

も物質文化も役立つことになるならば、人類の受くる幸福は實に偉大なるものであらう。この意味に於て法華經を將來の文明の中心に戴いて行かなければならぬ。文明の原則を教へ、今後の文明の指導者として法華經が立つて居ると云ふことは、言へやうと思ふ。その詳細のことはこの會に於て法華經の研究を爲されて居るのであるから言ふ必要はありませぬが、法華經の網格は、只今申した精神文化と物質文化の融合點たる一乘の教、又諸法實相の哲學的原理、又佛性開發の人身觀、本佛顯本の宗教的意義に就て、之を徹底的に研究なさつて、唯だ一通り文字が分つたとか、面白かつたとか云ふことでなく、自己信念の確立、今後の文明を救済する標的を把住されんとを祈ります。この法華經研究會から健全なる文明の指導者が續々輩出されることを切に祈る次第であります。

(完)

國民性に就いて

(二)

文學士 武田 顯龍

次に愛國觀念の強いことであるが是には二三の理由があると思ふ、理由の一は同民族に依つて國家が成立して居ると云ふことである、史家は今日南洋系だとか或は支那系朝鮮系等各系統の民族が混合して日本民族を成して居ると云つて居るが兎に角大和民族として打つて一丸となつて日本國家を組織し各系統間には何等風俗習慣等の異なる點が無く又國家理想の上に於ても異目を見出せないのである。

大國主命の出雲系統も天照大神の日向系統も同一根帶より派生して理想を同一にして居つた様に思ふ、又風俗習慣及び理想の異なるものとしては土蜘蛛等の穴居民族やアイヌ族等多少系統の異つた民族もあつた様だが是等は全體から眺めると極めて少數で

あり勢力も極めて微弱であり加ふるに御皇室の御仁慈の大御心と大和民族の寛大な包容性等が相ひ待つて是等微弱な民族は包容融和せられて一民族の様な形をなしたのである。

人種を異にし民族を異にする者同志の間に在つては相ひ排斥し嫉視して其所に争闘が起り圓滿を欠くのは人類生存上自然の人情だが同一民族に在つては其自體が血族關係に在る團體の擴張であるから自己民族の繁榮を計る爲に又他民族からの侵略を防ぐ爲に近心的に相ひ團結し相ひ愛するは自然の情であつて我が大和民族も相ひ集つて日本の國家を造つて居ながら民族を愛し護ることが即ち國を愛すること國を護ることであつたのである斯くて愛國の情は強め

られ來つたのである。

理由の二は島國であり且つ國の範圍が狭小であつたと云ふことである、一體文明と交通とは不可離の關係を有つて居るもので歐洲中世の闇を破つて現はれた啓蒙時代は歐亞の交通を頻繁ならしめた十字軍と云ふ春の恵に培はれて地殻を破つて出た創造の芽生えてあつた。私は歐洲に留學し又は旅行した友の身を羨やみもし又案じもして時々世界地圖を開いて見るが何時も驚くのは歐大陸の鐵道網政策殊に獨逸の伯林を中心にした鐵道網政策である、日本の鐵道網政策が素敵滅法に大きな網の目で鯨てさへも悠々と抜け逃げられ相な元始的な鐵道網であるのに獨逸を中心にした歐洲の鐵道網は實に小さなジャコ一匹も逃れられまじき細網であるのに實に驚くのである。他國との交通が便利な所は大に文明は發達し物資の供給及び頒配が自由自在であるから生活は從つて樂だが兎もすれば人情は遠心的となり一步誤ればコ

スモポリタンとなり團結力を弱めるものであるが交通の不便な所では人情は近心的となり從つて一步誤れば消極的退嬰的となり武陵桃源の夢に耽り易いが團結力だけは強くなる。

即ち我島國であると云ふことは是を過去にしては交通の不便なことであつた爲に國民の心は對他のよりも對內的に向つて行つて人心が自然に融和統一され風俗習慣等も自然に同様になつて來、從つて團結心が強められた、更に範圍が狭小であつた爲に爲政者の主義方針は津々浦々に迄もよく徹底して政治が行き届き自ら人心の統一が出來て團結力即ち愛國の精神が強められたのであつた。

理由の三は日本が太古から農業本位の國柄であつたと云ふことである、他人の兒女でも自分が親しく手鹽にかけて育てた子供は可愛いと同様に自分が親しく耕した田圃は一種云ふに云はれぬ親しみを持つものであるが此の感情が變て郷土愛となるのである。

る、又農業は作業の方法が工業と異つて除草除蟲のやうな老幼にも出來得る諸種の雜役があるから一個人又は壯年の男子ばかりで作業するよりは老幼男女混合で作業した方が科學的機械動力を用ひない限りは便利であり且つ生産上得策である。從つて農業本位で進むことは總て家族主義の社會制度を必要とするのである、即ち日本は昔から家族制度の社會組織であつた。

家族主義の社會制度に在つては家名が大切であり戸主の命令權が尊重せられ個人の權利個人の自由は或程度迄戸主權の前には犠牲を必要とするのである、個人よりも家を大切にすることを考へ個人の權利よりも戸主の命令權を尊重する犠牲の道徳は郷土を愛する思想となり統率者に絕對に服従する服從道徳となつてゆく、即ち此所に團結力が強められ愛國的精神が深く根をつけられるのである、更に農業本位の家族制度に至つては牧人の様に西から東へ北から南へ

と云つた風に漂流生活を送るわけにはゆかない、什廢なにしても一定の場所へ土着せなければならぬ、即ち自分の持ち物は何でも惜く手離せないと同様に土着した土地には離れ難い感情が即ち郷土愛である。

又一定の土地に土着すれば其の土地には尊き祖先の墳墓もあり思愛深き父母の墳墓もあり忘れ難き愛人の墳墓もあり育ぐくめる兒女の墳墓もある、是等の墳墓に香華を手向くことに依つて報恩謝徳の意を表はし又其に依つて亡き人の在りし昔を偲んで遺る瀟々思ひをひたぶるに忍ばうとするのであつて此の墳墓の在る土地は忘れ難く又親しみを感じ難いものである、此の感情が即ち郷土愛であり進んで國家愛となるのである。

即ち是等前記の理由が主となつて起つて來た團結力と郷土愛とが結合して此所に愛國觀念が盛になり更に犠牲道徳に依つて強められ服從道徳に依つて維

持せられて來たのである、神功皇后の三韓征伐と云ひ内訌の盛であつた北條時代に舉國一致元寇に備へた態度と云ひ豊太閤の文祿の役又は日清日露の戦役と云ひ皆國民の愛國的熱情の迸らしたものである、徂徠物茂郷一派を外にしては學者と云はず宗教家と云はず多くは愛國觀念の盛んな人であつた日蓮の如きは「一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事也」、又「汝一身の安堵を思はば先づ四表の靜謐を祈るべし」と叫んで大に愛國觀念を鼓吹し自らは殆ど愛國精神の権化であるかの様に見える程であつた、佛教は國家主義を主張するものであつて決して國家を無視する教ではない。國家を超越するを以て誇りとし或は無視して教の大を誇らんとするが如きは邪教邪説であつて佛教徒中斯の様な教を立てる者が彼此ある様だが是等の徒輩は井中の蛙類であつて佛教の傍系邪説である。

昔し池中の魚が池の周圍と言ふ堤即ち境界と束縛

とがあつて邪魔だから此の堤を取り去らうと相談し議一決して堤を撤廢したところが水は無くなつて池中の魚は皆死んだと云ふ話があるが國家を無視する者は此の池中の魚である、佛は説いて居る、誠に至言であつて今日我々が生命財産の安全保證され愉快に暮し得るのは皆國家共同の恩恵であることは如實の事實であつて誰も否定することを得まい、然るに此の明瞭過ぎる程の事實を無視して徒にコスモポリタンの思想に囚はれ國家を無視して世界主義同胞主義を唱へて得々たる者の今日だんだん増して來たのは池中の魚にも劣る者で實に遺憾千萬である

世界主義の思想必しも悪いとは云はぬが人間自然の人情を無視し歴史習慣を忘れ現實を無視して徒に理想を掲げて其は天空を望んで脚下の溝に氣のつかない者であつて殆ど痴人の夢に等しい、我等の生活我等の思想は一步一步が強く大地を踏みしめて居なければならぬ、理想は根強く現實に根柢を持つ

て居なければならぬ、此の意味に於て世界主義は根強き國家主義の上に立脚せなければならぬ、國家主義は眞正なる意味と目的とに於ては決して人類共存の目的に反するものではないと思ふ。

我國運の前途には雨か嵐か一沫の雲が漂ふて居る此の雲を拂ひ除けて白日の日本、光明の日本とするのは國民相互の愛國の至誠と團結の勢力とに俟たねばならぬ、日蓮聖人は「日は東より出て西を照す佛法亦々斯の如し、佛法必ず東土の日本より出ずべし」と叫ばれて日本が文化の中心となり世界人心を指導し光宅すべき位置に在ることを熱叫せられたが果して今日の日本人が聖人の此の理想に向つて進みつつあるだらうか？ 噫！！

愛國の熱情が大切だと云つても所謂御國自慢の誇大妄想狂となつたり又は頑迷な排他的根性になつてはならぬ。我國は世界戦争の終末ベルサイユの平和會議に人種差別撤廢案を持ち出して大に有色人種の

爲に氣を吐き一方に於て人道主義でありアイデアリズムの國民であることを世に示したが省みて自己に及ぶ時に國民は氣恥しい氣がせないだらうか

日本の人口を假りに七千萬とすれば其の中の六千九百九十九萬九千人は所謂平民で残りの一千人内外の華族と云ふ者の眼には平民奴隷として映じて居るし六千九百九十九萬九千人の中一百萬内外の人は他の残りの者の眼には新平、又は穢多の二字に依つて價值づけられた劣等人種として映じて居る、産れたばかりの天真無汚の子供には何の差別も無さそうだが是にもお人形の様に坊ちやま、お姫様と呼ばれる者もあるし猿の兒の様に赤ちやんと命ばれるもあるし頃の河原見た様に餓鬼と呼ばれるもある、何と差別の多いことではないか、是等の坊ちやま、赤ちやん、餓鬼が大きくなつては咀はしくも運命づけられた位置に執着して外人を見ては或はチャンコロと云ひ毛唐人と云つて侮蔑の態度と眼とて接しながら人

樂はず、此の濁惡の處には、地獄、餓鬼、畜生、
 盈滿して、不善聚おほし、願はくは、我れ未來に
 惡聲を聞かず、惡人を見ざらむ、いま世尊に向ひ
 て、五體を地に投じて哀を求めて懺悔す、唯ねか
 はくは、佛日われをして、清淨業の處を觀せし
 めたまへ。

と哀願しましたから、釋尊大慈悲の光明を以て、十
 方諸佛の淨妙の國土を觀せしめ玉ひしに、韋提希夫
 人、何れの佛土も清淨にして、光明ありと雖も、我
 れ極樂世界の阿彌陀佛の所に生ぜんと願ふと申しま
 したから釋尊微笑し玉ひ、汝及び未來世の一切の凡
 夫、淨業を修し西方極樂國土に生ぜんと欲せば、三
 福を修せよと説かれました。經に
 一つには、父母に孝養し、師長に奉事し、慈心に
 して殺さず、十善業を修す。

二つには、三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀
 を犯さず。

三つには、菩提心を發し、深く因果を信じ、大
 乘を讀誦し、行者を勸進す。

此のごとき三事を名づけて淨業とす、ほとけ韋提
 希に告げたまはく、汝いまだ知るやいなや、此の三
 種は、過去、未來、現在、三世諸佛の淨業の正因
 なり。

と教法を説き、此を行ふべき旨を示されました。
 此よりこの三福を修し難き者には、諸佛如來には異
 の方便ありとて、茲に念佛觀法を説かるゝのである
 念佛と云ふは、佛の慈悲、相好等を、心に思惟し、
 心に慰安を求め、自然善事を行ふようになるのが目
 的で、南無阿彌陀佛を唱へるのが正意でなひ。

淨土家の主張し、又は信仰の中心としてある處は、

稱名であるから、今日の人は念佛と云へば南無阿彌

陀佛と口に唱へることと思ふてあるけれども、觀
 經等の經意は字の如く佛を心に念することである。

元來歴史的に見ると念佛は小乘の五停心即ち、數
 息觀、不淨觀、慈心觀、因緣觀、界方便觀の中、
 界方便觀は凡人の身體を地水火風空識よりなりたつ
 ものであるから執着すべきものでない、觀念する

かはりに、佛の六根六境六識の功德を觀念する此を
 念佛停心と稱するもので、念佛の出發點はこゝにあ
 る、從て眞の念佛は釋尊の慈悲相好等を念するが

根原である、是れより廣く十方諸佛に及ぶことにな
 る、故に念佛は彌陀に限るものでない、しかし觀經
 では韋提希の希望により彌陀の念佛を説かれたもの
 である、念佛觀法に十六の順序が説かれてある、而
 して其の觀法が譬喩と教法が縱横に織込されてある

を知らねばならむ。

第一日觀、西方に向ひ、閉目開目一心に日沒を觀

ず。

第二水觀、水の微清より、冰の映徹を見、瑠璃の

想を作す(譬喩)

八種の清風、光明より出て、苦空無

常無我の音を演説す(教法)

第三地觀、睡時を除き晝夜極樂國の地を憶ふ

第四樹觀、七寶の行樹、七寶の寶珠を想ひ、十方

の佛國、その中に現すと想ふ(譬喩)

七寶、七樹は七覺支(教法)

第五池觀、極樂國土に八池水あり、一一の池水七

寶にてなれり(譬喩)

水は微妙の音を出だし、苦空無常無我

諸波羅密、念佛、念法、念佛の聲あり

(教法)

第六總觀、無量の諸天、伎樂を爲す(譬喻)
其音、念佛、念法、念比丘僧と鳴る

(教法)

第七華座觀、無量壽佛空中に住立し、觀世音、大勢至、左右に侍立し蓮華の上にあり、

(譬喻)

其の蓮華の葉も、脈も八萬四千の光明あり(教法)

第八像觀、阿彌陀の佛像、并に觀音勢至を大蓮華に置き、圓淨檀金の色の如くし、目を開きては之を見、目を閉ぢては之を思ふ

第九具身觀、無量壽佛の身相を觀ず、相に八萬四千、其の一一の相に入萬四千の隨形

觀ず、

第十四上品生觀、上中下あり

第十五中品生觀、上中下あり

第十六下品生觀、上中下あり

第十四の上品生より、第十六の下品下生に至るまで、順次修行減じ、從て上品上生の人、至誠心、深心、廻向發願心を具し、慈心、戒行、大乘經典讀誦、六念修行等の功德により、往生も早く、彌陀、觀音、勢至も直接手を授けて迎接し、彈指の利那に淨土に往生するが、下品には修行てきず彌陀の名を聞き又は彌陀と稱するだけだから、觀音勢至も代理がくる位になる。經に

下品下生の者とは、或は衆生ありて、不善の業たる、五逆十惡を作りて、諸の不善を具す、かくのごとき愚人惡業を以ての故に、まさに惡道に

好一一の好にまた八萬四千の光明ありと觀ず(教法)

第十觀世音觀、世音眉間より八萬四千の光明を流出す、手の十指の端、一一に八萬四千の畫あり、又た八萬四千の光あり(教法)

第十一勢至觀、此の菩薩、智慧の光りを以て普く一切を照らし、三塗を離れしむるに無上力を得、ゆへに大勢至なり(教法)

第十二普觀、自ら往生して、蓮華の中に結跏趺座したと想ひ、蓮華ひらく時、光明身を照らし、眼目ひらくと想ふ(譬喻)
諸佛菩薩虚空より、音聲を出す、此音十二部經と合す(教法)

第十三總觀、彌陀と、觀音、勢至、をまとめて

總して、多劫を経歷して、苦を受くること夥しなるなるべし、かくのごとき愚人、命終の時に臨みて、善知識に種々に安慰して、爲に妙法を説きて教へて念佛せしむるに遇へり、此の人、苦に逼められ、念佛するに違あらず、善友つけて言はく、汝もし念することあたはずば、まさに無量壽佛と稱すべしと、是のごとく至心に聲をして、絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿彌陀佛と稱す、佛名を稱するがゆゑに、念々の中において、八十億劫の生死の罪を除く、命終のとき、金蓮華の猶日輪のごとくなるが、其人の前に住せるを見る、一念の頃のごとくに、即ち極樂世界に往生することを得。蓮華の中において、十二大劫を満じて、蓮華をさきに開く、觀世音、大勢至、大悲の音聲を以て、其れが爲めに、廣く諸法實相除滅罪の法を

説く、聞きをはりて、歡喜して、時に應じて、即ち菩提の心を發す。是れを下品下生の者と名づく。是れを以て、淨土家は念佛即ち心に佛を觀念せざるも、口に稱名すれば、往生疑ひなしと云ふ。故に親鸞は

われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のものの信すればたすかるよし、うけたまはりて信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやくとも、われらがためには最上の法にてまします。たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがためには、器量あよばざれば、つとめがたし、われもひとと生死をはなれんことこそ、諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからずとてにくひ氣せずば、たれのひとかありて、あだ

をすべきや

と親鸞は常に諸餘の經典は勝れたりとも、余の如き愚迷のものは南無阿彌陀佛——なりと。厭世思想を鼓吹する邊、實に巧妙の者である、然しながら、經典の九品往生の意は、稱名を單にすゝめたるものにあらず、教法を修するを得ざれば、せめて稱名だけなりとする可なりとの意で、つまり佛陀を知らざる者には佛陀のみなを知らしむるだけでも功德ある位のものである、故に上品中品は彌陀が來迎するが、下品では代理の化佛であり、下品下生に至つては、誰も來迎せぬ、從て上品上生の人は直に無生忍に至るが、中品下品と順次蓮華中に一日、七日、一切、六劫と長く幽閉され、下品下生になると、十二大劫も蓮華中に密閉せられてを譯であるから、釋尊滅後往生したものは、未だ一人も成佛せず蓮華中

に密閉のまゝになつてをる、いやそれは素人考へて法然親鸞は巧妙に解釋して密閉からだしてをる、よし法然親鸞が出してくれたいとして、出て何を聞くかと云へば、諸法實相の理を聞くのである、しかれば折角往生して法然親鸞の御蔭で早く蓮華から出ても、法華經方便品を聞くだけになる。

觀經の結末に

若し善男子、善女人、たゞ佛の名二菩薩の名を聞くに、無量劫の罪を除く、いかにいはむや、憶念せむをや

とある故に經の意は佛名より觀佛、觀佛より教法と次第に勧められたる説相と見ねばならぬ、然るを教法より、觀佛、觀佛より、稱名、稱名、本願なりと云ふに至つては轉倒の解釋である、轉倒なるが故に厭世思想になり、正解せば人生の活教訓を見出すこ

とがてさる

第八像觀に

諸佛如來は、是れ法界身なり、一切衆生の心想の中に入りたまふ、是のゆゑに、汝ら心に佛を想ふとき、是の心すなはち、是れ三十二相八十隨形なり、是の心佛を作る、是の心是れ佛なり、諸佛正徧知海は心想より生ず

と念佛の意義が現に説かれてある

親鸞は處々に涅槃經を引き、彌陀の本願を立證してをる、觀無量壽經には、韋提希夫人は無生忍を得たことになつてをるが、阿闍世は惡逆のまゝにのこつてをる。そこで阿闍世の結果をつけねばならむが、彌陀も感情的に韋提希を救済しても、すこし理屈をしつてをる阿闍世は西方へ行かぬと見へる、よつてこの結末は涅槃經に至る、故に親鸞は涅槃經を顯淨

土真實文類第三に引てをる、しかるに其の記述は涅槃經では長いものであるから其要所だけ茲にあげる。

そのときに、王舍城に阿闍世王あり、その性、弊惡にして、よく殺戮を行ず、口の四惡、貪、嗔、愚痴を具してその心熾盛なり乃至しかるに眷屬のために、現世の五欲の樂に貪著するがゆゑに、父の王の罪なきによこさまに逆害を加す、父を害するによりてあのれが心に悔熱を生ず、心悔熱するがゆゑに、偏體に瘡を生ず、そのかさ臭穢にして附近すべからず、すなはちみづから念言すらくわれいまこの身すでに華報をうけたり、地獄の果報まさに近きて遠からずとす。そのときにその母韋提希后、種々の藥をもてしかも爲にこれを塗る、その瘡つゝに増すれども、降損あることなし王す

なはち母にまよふさく、かくの如きのかさは、心より生ぜり、四大よりおこれるにあらず、もし衆生よく治することありといはゞ、この處あることなけんと時に大臣の勸めにより、富蘭那、末加、藥拘舍離子、那蘭耶毘羅跋子、阿耆如翅金欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼乾陀若健子の六師外道交々罪の根本を説く王之を聞き未だ安慰するを得ず、最後に耆婆、王のところ往至して曰く大王、安眠することをまんやいなやと、王偈をもて答へていはく、耆婆、われいさ病おもし、正法の王において惡逆害をおこす。一切の良醫、妙藥、呪術、善巧、醫病の治するにあたはざるところなり、何をもつての故に、わが父、法王法のごとく國をおさむ、實につみなし、よこさまに逆害を加ふ、魚の陸に處するがごとし、われひかし智者のときて

いひしをさき、身口意業もし清淨ならずば、當に知るべし、この人かならず、地獄に墮せんと、われまたかくのごとし、いかんぞまさに安穩に眠ることをうべきや、いま我また無上の大醫の、法藥を演説して、わが病苦をのぞくことなしと。耆婆こたへていはく、よきかな、王つみをなすといへども、心に重悔を生じて、しかも慙愧をいだけり、大王、諸佛世尊つねにこの言をときたまはく、ふたつの白法あり、よく衆生をたすく、一

敬す、慙愧あるがゆゑに、父母兄弟、姉妹あることをとく、よきかな大王、つふさに、慙愧あり、王の言ふところのごとし、よく治するものなけん、大王まさにしるべし、迦毘羅城に淨飯王の子、姓は瞿曇氏、悉達多となづく、師なくして覺悟せり、自然にして阿耨多羅三藐三菩提をえたり、これ佛世尊なり、金剛智まし、よく衆生の一切惡罪を破せしむ。もしあたはずといはゞ、この處あることなけんと。

には慙、二には愧なり、慙はみづから罪をつくらず、愧は他をおしへてなさしめず、慙はうちにみづから羞耻す、愧は發露して、ひとにむかふ、慙は人にはづ、愧は天にはづ、これを慙愧となづく、無慙愧はなづけて人とせず、なづけて畜生とす、慙愧あるがゆゑに、すなはちよく、父母師長を恭

そのときに世尊、大悲導師、阿闍世王のため、に、月愛三昧にいれり、三昧にいりおはりて、大光明をはなつ、そのひかり清涼にしてゆきて王の身をてらしたまふに、身の瘡すなはちいえぬ。王のいはく、耆婆、かれは天中天なり、なんの因縁を以て、この光明を放ちたまふぞや、耆婆答

ていはく、大王、いまこの瑞相は王のために及ぼすにあひ似たり、王さまに世に良醫の身心を療治するものなしといふがゆゑに、この光を放てまづ王身を治す、而してのちに心にあよふ、王のいはく耆婆、如來世尊、また見たてまつらんと念ふをや耆婆答てまふさく、たとへば一人にしかも七子あらん、この七子の中にやまひにあへば、父母の心平等ならざるに非ざれども、しかも病子において、心すなはち偏におもさがごとし、大王、如來もまたしかなり、もろ／＼の衆生にあきて、平等ならざるに非ざれども、しかも罪者において、心すなはち偏におもし、放逸のものにおいて、佛すなはち慈悲を生ず、不放逸のものには、心すなはち放捨す、何等をかなづけて不放逸のものとすといはく六住の菩薩なり、大王、諸佛世尊もろ／＼

の衆生におひて、種性、老、少、中年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使をみそなはず、たゞ衆生の善心あるものをみとをなはず、もし善心あれば、すなはち慈念したまふ、大王まさにしるべし、かくのごときの瑞相は、すなはちこれ如來、月愛三昧にいりて放つところの光明なりと、王すなはち問ていはく、なんらをなづけて月愛三昧とすると、耆婆こたへていはく、たとへば月のひかり、よく一切の優鉢羅華をして開敷し鮮明ならしむるがごとし、月愛三昧もまた／＼かくのごとし、よく衆生をして善心開敷せしむ、大王たとへば月のひかり、よく一切みちをゆく人の心に歡喜を生ぜしむるがごとし、月愛三昧また／＼是のごとく、よく涅槃道を修習せんもの、心に歡喜を生ぜしむ、このゆゑに、また月愛三昧と

なづく（此の前後に佛性論と涅槃論あり）そのときに阿闍世王、耆婆にかたりていはく、耆婆、われ今いまだ死せずしてすでに天身をえたり、短命をすてゝしかも長命をえ、無常の身をすてゝ、しかも常身をえたり。三寶つねに世にましまさん。我いままさに得べきところの種々のもろ／＼の功德、ねがはくばこれをもて、衆生の四種の魔を破壊せん。われ惡知識にあひて、三世のつみを造作せり、いま佛前にして悔ゆ、ねがはくば後さらに造ることなからん、ねがはくばもろ／＼の衆生、ひとしくこと／＼く菩提心をおこさしめん。心をかけて、つねに十方一切佛を思念せん、またねがはくばもろ／＼の衆生、なかくもろ／＼の煩惱を破し、了々に佛性をみること、なを妙徳のごとくして、ひとしからん。

此等の經文を引き來つて親鸞は

こゝをもていゝ大型の眞説によると、難化の三機難治の三病は、大悲弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治し、これを憐愍して療したもふ、たとへば醍醐の妙藥の、一切の病を療するがごとし、濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべし、本願醍醐の妙藥を執持すべきなりとするべし。

とう／＼親鸞は釋尊の大慈大悲の救済を、彌陀の救済に引入れ、釋尊を疎外し、彌陀説明の材料とするに至つては、誹謗正法の罪を親鸞自ら犯かしたことになりはしまいか。

涅槃經の阿闍世王に關する教説は、六師外道の邪説多く人を誤る處を教へられておりました、今日の學説でも此の六師外道に類する論法で、倫理道德を

論じ、罪惡を説明し、心身の關係を説かんとする人は澤山あることとありますから、此の六師外道の説も考察する必要がありますが、是れは此の稿の直接のものでありませんからばさしました。罪惡の根元論等は充分考究して佛陀の眞意を知らねばならぬと思ひます。

阿闍世王の開悟は、佛性常住と涅槃の原理を譬喩因縁等により、釋尊より懇ろに教示されまして、犯かせる罪惡を悔い、慙愧清淨にして、心の慰安を得、病痛も癒へてをるのでありまして。親鸞流の彌陀の本願の説明にならぬとは釋尊も御在じない位と思ひます。

阿彌陀經は、極樂の相貌、六方諸佛の證誠が説

濁惡世の、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の中において、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲めに、是の一切世間難信の法を説くと、舍利弗まさに知るべし、我れ五濁惡世において、此の難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に、此の難信の法を説く。是れを甚難とす。

此れて釋尊の光明が六方十方を照らし、勿論西方も此の光明輝き、終に六方の諸佛から釋尊に反射したことが注意すべきものと思ふ。

眼を轉じて法華經に就てみるに、過去に大通智勝如來あり、如來に十六人の王子あり、父如來に就て成佛し、十方の國土を分擔教化することが説かれてある。法華經に

てありますが、極樂のことは前に觀經の時に引きましたし、六方諸佛稱讃は、六方ぢや十方ぢやと云つたり舌相が長かつた短かつた、光りのぐわいがちがつたと云ふよふなことを法然も親鸞も云ふてをりますが、私は舌を出したり、足に面を接したりすることは印度の敬禮かと思ひます、つまり諸佛讃念したまふと云ふことは、阿彌陀に限らず、舌相も又た然り、從て六方の諸佛稱讃は特種の者でありません、只だ六方諸佛でんんに稱讃してある意は教意上から面白くないと思ひます、最後に阿彌陀經に

舍利弗、われいさ諸佛の、不可思議を、稱讃するがごとく、彼の諸佛等もまた我が不可思議功德を稱説して、是の言を作したまはく、釋迦牟尼佛、よく甚難希有の事を爲して、よく娑婆國土の、五

十六の沙彌、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於て、現在に法を説き玉ふ、無量百千萬億の菩薩聲聞有て、以て眷屬とせり、其の二りの沙彌は東方にして作佛す、一をば阿闍と名く歡喜國に在す、二をば須彌頂と名く、東南方に二佛、一をば師子音と名け、二をば師子相と名く、南方に二佛、一をば盧空住と名け、二をば常滅と名く、西南方に二佛、一をば帝相と名け、二をば梵相と名く、西方に二佛、一をば阿彌陀と名け、二をば度一切世間苦惱と名く、西北方に二佛、一をば多摩羅跋拏檀香神通と名け、二をば須彌相と名く、北方に二佛、一をば雲自在と名け、二をば雲自在王と名く、東北方の佛をば壞一切世間怖畏と名く、第十六は我れ釋迦牟尼佛なり、娑婆國土に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成せり

此によつて見ると、阿彌陀は、釋尊の兄弟になつてある、而して法華經の説が進むて行くと、此の大通智勝如來が釋尊中間教化の一如來になつてくる、しかれば阿彌陀は釋尊の一化佛と認めなければならぬ譯で、法然親鸞の本願本尊も一假説に過ぎぬことになる。

阿彌陀經を翻譯した羅什は、又法華經を譯した人であるが、彼れは又た「思惟略要法」を譯してある。此の書によると、第一四無量觀法、第二不淨觀法、第三白骨觀法、第四觀佛三昧法、第五生身觀法、第六法身觀法、第七十方諸佛觀法、第八觀無量壽佛觀法、第九諸法實相觀法、第十法華三昧觀法、に到達してある。茲迄いたつて觀念の意義が明瞭になるのである。

又法華經に

法華經と伺はるゝのである。

又法華經に

爾の時に佛白毫の一光を放ち玉ふに、既ち東方五百萬億那由陀恒河沙等の國土の諸佛を見たとまつる、彼の國の國土は、皆願樂を以て、地となし、寶樹寶衣を以て莊嚴となし、無數千萬億の菩薩の中に充滿せり、徧く寶幢寶網を張りて、上へにかけたり、彼の國の諸佛、大ひに妙へなる音を以て、而も諸法を説きたまふ、及び無量千萬億の菩薩の諸國に徧滿して、衆の爲めに法を説くを見る南西北方四維上下の白毫相の光の所照の處、亦た復た是の如し。

釋尊の光明は十方世界を照らし、あます所がない。又云く

十方の諸佛雲の如く集まり、釋迦牟尼世尊、多

東方の淨華宿王智佛、妙音菩薩に告げ玉はく、汝彼の國(娑婆)を輕ろしめて、下劣の想を生ずること莫れ、善男子、彼の娑婆世界は、高下不平にして、土石諸山穢惡充滿せり、佛身卑小にして、諸の菩薩衆も、其の形亦た小し、而るに汝が身は四萬二千由旬、我が身は六百八十萬由旬なり、汝が身は第一端正にして、百千萬の福あつて、光明殊妙なり、是の故に汝往いて、彼の國を輕しめて、若は佛菩薩及び國土に下劣の想ひを生ずること莫れ。

此れより妙音菩薩娑婆に來り、釋尊を禮拜供養す、妙音菩薩の相好、天の技樂、寶臺の美等非常に善美を盡くしてある、而して妙音菩薩世相に就て釋尊に問ひ奉り、釋尊に環堵を奉上する説は、全く釋尊中心にして、娑婆を輕んぜしめざる邊、人生淨化の

實如來の七寶の塔の中の師子の座の上へましまして、結跏趺坐し玉ふを見たとまつる。こゝまで觀佛も進まねばならぬ。國有り娑婆と名づく、是の中に佛います、釋迦牟尼と名けたてまつる、今諸の菩薩摩訶薩の爲めに大乘經の妙法蓮華教菩薩法、佛所護念と名づくるを説き玉ふ、汝等當に深心に隨喜すべし、亦た當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし、彼の諸の衆生虛空の中の聲を聞き已て、合掌して娑婆世界に向て、是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛

涅槃經に云く
大慈悲の雲衆生を蔭ふて、

大正12年
1月

大正12年
2月

大正12年
3月

大正12年
4月

甘露の慧雨を一切に雨らす。
慧日の光り無明の暗を照せば、
無明の衆生聖道を見ん
聖月の慈光六趣を照せば、
三有光りを蒙りて衆苦を脱せん。

(完)



日蓮主義より見たる無量義經

(第六回)

井村 日 威

其比丘名曰大智舍利弗

眞正解

説

(五、六——六、三)

此文は別序の中の第二聲聞の德行を歎ずる一段である、萬二千の聲聞の中の二十人を列ねた、此中に大智舍利弗あり、大愚沙伽陀ありて、一切の機根を

網羅せり、聲聞の人は、我等人類の佛陀の教化を蒙りしものである、菩薩は我等とは異種類なるかの威あるも、聲聞の人は我等と同族同種である、其教化を蒙りしものの中に、沙伽陀即ち周梨榮特尊者、愚者の代表として有名な人がある、十四字の偈を覺

えるに七年もかゝつたと云はるゝ人である、我等如何に愚なりとも、十四字の偈を覺えるに七年もかゝるまい、愚者大に心を安じて可なりである、但し信仰が有るからであることを忘れてはならぬ、詳細の德行は菩薩の下に擧たゆへ、此には至極簡明に「盡諸結漏無復縛著眞正解脱」の十二字を以て德行を歎

るものである。

大哉大悟大聖主

無復諸大陰入

界

(七、二——七、五)

此文以下は佛徳を歎す、十節に分つ、第一に「總じて佛身を歎す」の一段が此四偈である、佛身の全體を歎したもので、此文に依つて佛身とは法身、報身、應身の三身を一身に具有したもので、此れを各別に考へて居るのは佛陀の全體を意識して居るものでない

爾時大莊嚴

説偈讚言

(六、三——七、一)

以下此品を説るまで、諸菩薩讚佛の偈を説くのである、先づ三業の供養を明す、佛前に前んで、頭面に御足を禮し、諸の供養を奉るは、身業の供養なり、合掌一心は意業に恭敬を表す、説偈讚言は口業に佛徳を讚歎するのである、此が三業の供養である、我等の信仰の形に於ても三業の供養は忘るべからざる

いと云ふことが明瞭になるのである、法身の體は一切處に遍滿すること虚空の如くなるが故に「大哉」と云ひ、其法身の體を照して圓滿なること日天子の如くなるが故に「大悟」と云ひ、四聖の中佛を主となすが故に「大聖主」と云ふ、大哉とは法身の徳を歎じ大悟とは報身の徳を歎じ大聖主とは應身の徳を歎す、即ち釋迦牟尼佛の一身に三身の徳を具せらる

を稱歎したるなり、永く六垢(瞋、害、慢、癡、疑、見心不相應、)を離るゝが故に「無垢」と云ひ、六染(貪、瞋、癡、慢、疑、見心不相應、)を離るゝが故に「無染」と云ひ、六著(貪、瞋、癡、慢、疑、見心不相應、)を離るゝが故に「無著」と云ひ、佛陀は無著の聖者なり、三界人天は未調の象馬の如し、唯佛一人のみ能く調へ、能く御するが故に佛陀を「調御師」と云ふ「道風徳香薫一切」とは一道の風五性有情を扇ぎ三徳の香一切有情に薫するを云ふ、一切の妄情を基として何事をも發作せざるを説いて「智恬かに情泊かに慮凝靜なり意識し識亡して心亦寂なり」と云ふ、意識心の三は何れも心であるが、外面に現はれたる心と内面に隠れて居る意識とを分別したのである「斷夢妄」とは生死の長夜に無明の眠より覺めた

るを云ふ「思想念」とは妄想雜念で、無明の眠より覺めたる時は妄想雜念現起せざるなり、無明現起せざれば、其に原因する現象なきが故に「諸大(地、水、火、風、空、識、受、想、行、入、)陰(色、受、想、行、入、)入(十二入、眼耳鼻舌身意の六根と色、聲、香、味、觸、法の六境となり、)界(十八界、)其因とし善惡の業感に依る身心ならざるが故に斯く云ふたのである、然らば如何なるものが佛身であるかと云ふことは大節以下に委しく説いて居るのであるが、今は其總體に就て佛身を意識せしめたるものである。

其身非有亦非無 非紅非紫種々

(七、六——八、二)

此一節は「内證身を歎ず」る一段である、前節總歎の中に法身の徳を歎じて「大哉」と云ふたが、其大なる程度形式を鮮明に了解せしむる爲に此一節があ

る、本節より下は三身の一々に就て其内容を説明せんとしたのであるが、先づ理法身の徳を歎じた、法身とは天然法爾の身と云ふことで、眞理の身と云ふことである、佛陀の證悟は眞如の妙理即ち眞理を證つたものである、其眞理とは何ふ云ふものかと云ふと、今の文に「其身は有にあらざる亦無に非ず」等の非の字が卅四字列ねてある、要するにコーユーものと擧げて示すことが出来ないものであると云ふことが示されてあるのである、法華經の方便品に諸法の實相は唯佛と佛とのみ乃し能く究盡し給へりと云ふた意味と同じことで、其眞理は證悟したものの外には了解の出来るものではない、それかと云ふて全然影も形も無いと言へばソでない、チャンとある、有ると云ふて何んな形、何んなものと説明することはない、ソナ形や杯を認めればそれは眞理で

は無にことに成る、ソコデ斯様に非の字を列べて其意味合を言ひ顯はしたのでありますから、その工合も餘程ウマク考へねばならぬ、一寸六ヶ敷ところであります、有無の二邊を離れたる中道の妙理なるが故に「非有亦非無」である、因縁の所作にあらざるが故に「非因非縁」である、四性(自、他、共、無因、)を離るゝが故に「非自他」、外の形色を離るゝが故に「非方非圓非短長」四生(胎、卵、濕、化、)を離るゝが故に「非胎非卵非濕非化」なり、三種の常(斷、相、續、)なるが故に「非生滅」なり、四大等の所造にあらざる、無明の緣起する處にあらざれば「非造非起」なり。四相(生、住、異、滅、)に移されざるが故に「非爲作」なり、四威儀に約して辨せば隨緣の行住坐臥なるが故に其法身の體は「非坐非臥非行住」なり、動靜無きが故に「非動非靜非閑靜」なり、



話 童

少年少女欄

ミニオンの唄

古田 昂 生

あなたたちは、「ローレライ」と云ふ話を知つてゐるでせう。

美しい少女がライン河の川邊の巖の上で、妙な音楽を奏でつ

なじかは知らねど

心はびて

昔のつたへは

いと身にしむ、

淋しく暮れゆく

ラインの流れ
入日の山々
赤くはゆる
と歌つたとゆう、あの「ローレライ」の話を知つてゐらつしやるでせう。

その「ローレライ」のお話のやうに、このお話も、いつの頃から、歐洲の人たちが「いゝお話だ」と云つて、みんなが知るやうになりました。

それは、ある町の出来ごとでした。

この町がある朝

いつものやうに深い眠からさめて、朝の大氣を思ふさま、呼吸してゐました。

町の人たちは、寺院の高い塔から流れてくる、ガラン、ガラン ゆう鐘の音を聞き乍ら、一生懸命に祈りをしてゐました。

こゝは、その町のむさくるしい宿屋です。

中は大變さたない、けれ共また大變大きな家でした。

ガヤ／＼と、昨夜を、このむさくるしい假屋に、一夜の夢を結んだ人たちは、朝起ると、自分の身たしなみや、曳いて來た馬車の手入れや、持つて來た道具の始末などをしてゐました。

大きな不格好な靴でガタ／＼とゆか板を踏む音

や、ベチャ／＼何かしら唾舌つてゐると云ふたいへん下等な宿屋の朝の有様を、窓のそとから二羽の駒鳥が囀き乍ら見てゐました。

宿屋の朝飯がすんだ頃

その宿の門口に一人の若い人が立つてゐました。

「宿の御主人! 私をしばらく留めていただけませんか」

大變丁寧な聲が聞えたので、宿の主人はデブ／＼した體をゆすぶつて門口に出てみると、一人の若い、たいへん上品な人が立つてゐました。

「どうぞ、どうぞ、こんなむさくるしい家ですが、ごゆつくり」

「さう、有難う、では頼むよ」

そして若い人は中へ入りました。

「へい、お二階のこの梯子段を上つたところの三番

目の室が空いてゐます」

「そうかい、有難う」

若い人は、快調に梯子段を、トン／＼と登りました、登り切つて了つたとき、ひよつくり、その若い人は一人の少女に會ひました。

その少女は汚い着物をつけてゐました。が、たいへん鼻筋の通つた美しい娘でした。

ひよつくり若い人はぶつかりさうに出會つたので

「呀ッ！」

と吃驚しました。

すると少女は若い人を見てニッコリほ／＼えみしました。若い人は

「あなたは、この人？」

と聞きました。すると少女は

「いゝえ」

と答へました。

「では」

「はい、十日ばかり前から留つてゐるんです」

「どこから來たの」

「暖かい南の國から」

「お父さんや、お母アさんと一共ですか」

「いゝえ」

「では、兄いさんと、姉えさんと」

「いゝえ」

少女は悲しさうに首をたれました。若い人は自分の部屋へゆくことは忘れてしまひました。

「ぢや一人？」

「いゝえ、あの大ぜいのおぢさんと」

さう云つたなり、少女は梯子段を下りていつてしまひました。

若い人は、やがて、氣がついて自分の部屋に入りました。

それから十日ばかり過ぎると、この若い人と、少女は、すっかり仲のいゝお友達になりました。

若い人はウキルヘルムと云つてその頃有名な畫家でした。その宿屋に止まつて、附近の美しい景色を描きに來てゐたのです。

少女はミニオンと云ふので、お父さん、お母アさんも、姉えさんも、兄いさんもありません。

只一人ぼつちです。

そして或る人買ひにさらわれて、曲馬園の中へ入れられました。

朝早くから、たゞき起されて、馬に乗るお稽古を

し、晝はあゝきな小屋がけの中で、大ぜいの見物の前で、曲馬を見せてゐたのです。

「てネ。わたし曲馬を、もしやり損じると、あのおぢさんたちが、三日も四日も、御飯をたべさしてくれないの」

「さうか」

ウキルヘルムは心できめました。

「よし、この不幸な少女を救つてやらう」

とさつそく、曲馬師の親方の處へ行つて、いくらのお金を出して、この少女をもらひ受けました。

ミニオンはどんなに嬉んだことだらう、と、思つて、自分の部屋へ戻つてきました。

ミニオンは自分の部屋で小ぢやい猫と戯れてゐました。

「ミィちゃん。今日からは私の家の人だよ。だから、よい子にならなくてはわけないよ」

「ハイ、いゝ子になります」

ミニオンはこんなにすなほな子でした。それからミニオンは本當にいゝ子でした。

一生懸命ウキルヘルムが繪を描く手助けをしました。

繪を描いてしまふと、いろ／＼面白い話を聞かして、もらひました。

「ドンキホーテ」だとか「オデッセイ」だとか、

「アラビヤナイト」だとか、いろ／＼話を聞きました。

ミニオンは毎日毎日お話を聞いてゐました。が、ウキルヘルムさんに何かして、お慰めしたいと、考えました。

或る夜でした。

ウキルヘルムは大そう疲れて歸つて來ました。

「お歸りなさい」

「あゝ、今歸つたよ、今日は大変つかれたよ」

「そう、では、お歸りをして見せて上げませうか」

「あゝ、是非みせておくれ、」

ウキルヘルムは一體ミニオンがどんな踊りをするだらうと、ほゝえみ乍ら見てゐました。

するとミニオンは窓から外の道に向つて誰れかを呼ぶやうでした。

と、梯子段をトン／＼登つて來て、その部屋へ入つてきました。一人の音楽師です。

グアイオリンを抱えて、ニッコリ笑んで入つて來ました。

「ミニオンさん今晚は」

「はい、あのネ、この間から教えて上げた、あの歌を弾いて下さい」

「承知しました」

「ウキルヘルムさん、これから踊りますよ」

ミニオンは卓子の上に立ち上りました。小さい卓子は二尺四方位です。その上でミニオンは踊ると云ふのです。

グアイオリンはなりだしました。

ギー、ギー、チョン、ビー／＼。

ミニオンの踊りも始まりました。彼の女の動くことの速く、軽く、たいへん上手に踊るのです。

ウキルヘルムはすっかり疲れてゐることを忘れてしまひました。

そうして驚いてしまひました。

「うまいッ 踊りの名人だ、都てみた踊り手より、

はるかに名人だ」

ウキルヘルムは自分を忘れて、感心しました。

それから時々、ミニオンは踊つたり、歌を唱つたりして、ウキルヘルムを慰めました。

然しある日のこと。

ウキルヘルムは寫生に出掛けたなり宿へ歸つて來ませんでした。

その晩はミニオンも眠らないで待つてゐました。

その翌る日も歸つて來ませんでした。その翌る日も、その翌る日も、そうして、とう／＼それつきり歸つてきませんでした。

ミニオンはどんなに悲しんだこととせう。

泣いて／＼涙のかれて了ふまで泣きました。夕もやに包まれて、白樺の林へ小鳥がチ、と歸つ

てくる頃になると、悲しいミニオンの歌が夢のやうに流れてきます。

シトロン、レモン

生ひ茂り

青葉がぐれに

オレンジの

茂れる園を

君知るや

あゝまた、あの歌が聞える。

ミニオンが悲しさに歌つてゐるのです。お、聞える。聞える。ミニオンの悲しい歌が……

あなたには聞えませんか。聞えるでせう。

雑報

上野自治會館に於ける

立正大師賜號奉戴正式

去る十一月十三日水交社に催された奉戴式は御宣下當日關係當事者のみの式であつた、更に廣く御門下各派有志を集めて奉戴正式を舉行することゝなつたのが去六日上野自治會館に開かれた奉戴式である、案内状によつて參列した會衆は開會前の午前九時半には早階上階下すべて満場となつて、讃歌奉唱の爲めに參列した大崎日宗大學生の四百餘名は悉く通途に堵列のまゝであつた。

式壇正面には立正大師日蓮聖人の御尊影（水鏡の御影、正中山藏）を奉掲し、其下に賜號宣下牒を奉安し、各派管長席之に正對して、左右には來賓及御門下の諸名士席を設け、十時の時計をカツキリと以

記念本發行の豫告

立正大師諡號奉戴記事

布裝天金箱入
一部正價八拾錢
郵税金 六錢

内容は紙裝奉戴記事の外に各教團管長猥下及崇敬署名者各閣下の題字を乞ふの豫定なり

永久に宗門史上の大慶典を記念せんか爲に特製記念本を調製して希望者に頒布す發行は大正十二年一月中の豫定なり

東京市淺草區北清島町十四

發行所 日蓮聖人大師號追賜奉祝事務所

電話 下谷 六三一〇番
振替東京一二一九番統一關口座

上式衆が着席する、軍樂隊の奏樂があつて、日宗大學生の讃歌奉唱がある、續いて國柱會雅頌部員の雅樂が劉曉として天樂を奏する、磯野日蓮宗管長の發聲壽量偈の誦經に會衆一同唱和する、畢つて本多顯本法華宗管長の欽戴疏朗讀がはじまる、此間各新聞社の寫眞班はしきりとカメラを動かす、尋て小泉身延山貫首の祝詞朗讀、鎌田文部大臣（代讀）宇佐美府知事、後藤市長（代讀）犬養毅（代讀）諸氏の祝詞、次に床大前内相の祝賀演説となる。

日蓮聖人の偉業は世のすてに認むる處、今度の賜號によりて新たに印象を深からしむ、思想問題の根本的解決は世界の求むるところである、今日の盛儀を見るは諸君の歡びのみならず私も共に有がたき聖旨を奉戴して限りなき歡びを感ずる……、聖人の遺業を恢弘するはこれ世界の平和、人類の幸福にして、我國の安國も亦之に依て得られるのであると結ばれ、大拍手の裡に還席すれば、

次に海軍中將佐藤鐵太郎氏は大迫大將に代つて自作の賜號慶讃の長歌を披露された、次に子爵小笠立原長生氏温平たる風丰恭虔な態度

て

立正の二字は、聖人の理想なり實行なり精神なり法華經の理想は宇宙の靈化にあり、而して物には順序がある、日本は世界の中心なるが故に日本靈化は即ち宇宙靈化の序である……その中心主義の立正……尊皇の思想は從來門下のみ之を認めたり、然るに今回の賜號は之れ國民的自覺の啓蒙である養正の建國、時は大正、而して賜號は立正、正立つて國始めて安し、この賜號あへて上人の爲に非ず、實に國家民生の爲めなりと結歎された。

其次に國柱會前總裁田中智學居士は悠然と起つて過去七百年間日蓮上人に對して賜號無かりしは、全く法國時機の感應せざりしに因る、法華經と日本國とは世界を解決するにあり、然るに今日迄はその舞臺まだ開かれずありたり、今や政治經濟思想問題すべて世界的となつて日本國と日蓮主義とが登場すべき舞臺が開かれたのである、大正の今日法國時機等しく感應して國家は公に日蓮主義を認め、上人の精神たる立正の二字を天子の御聲にして下されたのである、過去七百年間の各派の論争は之れ研究時代な

り、今日の賜號宣下は即ち討論終結なり、各教團一齊奮起異體同心祖業を恢弘してこの開かれたる新しき世界的舞臺に登場して聖旨を空しくせざれと結して、降壇

右舉つて司會者の祝電披露がすむと、大迫大將一場の挨拶を述べられて、會衆の起立を促し、軍樂隊の奏樂につれて一同「君ヶ代」を奉唱、終つて大將發聲の下に二千餘の會衆滿腔の至誠をこめて、天皇陛下萬歲、日蓮主義萬歲を三唱して式を徹し、會衆一同は場外に設けた天幕内、さては東華亭等にて赤飯の折詰に腹をこしらへて午後の講演の開始を待つ、人々の面には歡喜の色緊張の氣が溢れてゐた。

午後正一時講演開始野澤陸軍少將「證號宣下と思想問題」の下に續々數千言續いて武田宣明僧正「證號宣下に依つて與へられたるものは何ぞ」田中智學居士「法國冥合」佐藤海軍中將「證號宣下に對する感想」本多大僧正「立正大師の證號に就て」の講題を掲げて順次登壇熱誠を披露せられ一同感激の裡に午後四時三十分奉戴正式は終了を告げた。

當日式場に於て諸家の奉讀された祝辭祝歌は左の

如くである。

慶祝文

我本化上行勸立正大師日蓮大菩薩ハ曾テ聖職ニ應ジ大日本帝國ニ降臨シ以テ塔中別付ノ終宗人天救護ノ大法ヲ開キ給フ、乃チ國難ヲ當時ニ豫言シテ一世ヲ警破シ諸宗ヲ八方ニ折伏シ三類ヲ招徠ス、然リト雖モ廣大ノ慈教ハ四洲轉妙ヲ想トシテ遙遙シ深淵ナル慈澤ハ末法ニ流注ス只夫折伏通化ハ本化顯得ノ主眼ナリ故ニ排謫迫害ノ族ハ四洲ニ強國シ輕侮輕安ノ徒ハ後代マデ遺マズ伏シテ惟フニ、聖文武大正天皇陛下ハ仁慈海嶽ヨリモ深高ニシテ能ク德ヲ尊ビ忠ヲ盡ハシ給フ長クモ我宗祖大聖人ノ行業古今ニ高ク立正安國ノ教義ハ萬世不磨ノ慈光タルヲ聞召サレ泰クモ本年十月十三日我祖ノ忌辰ヲ以テ立正大師ノ遺教ヲ追證セサセ給ヘリ曷ゾ其レ慈恩ノ深重ナル情等宗徒タルモノ感泣欽敬措ク所ヲ知ラザルナリ洵ニ百年ノ國難一時ニ佛ビ澤中ノ黃鶴雲外ニ翔翔スルノ感ナシトセンヤ願フニ情等ハ猛省奮起益々本化ノ教旨ヲ恢宏シテ皇化ヲ翼賛シ國家ニ寄與シテ聖恩ニ奉答センコトヲ期セザルベカラズ、爰ニ聖祖門下各派會同シテ大師證號宣下ノ慶祝大會ヲ開カル日慈恩懷懷リ爲シ乃チ老幼ヲ擧ゲテ東京ニ出デテ本日ノ盛典ニ臨ムノ光榮ヲ有ス仍チ一片ノ赤誠ヲ披露シ謹シテ祝詞ヲ綴ブト云爾

時維大正十一年十一月六日

日蓮宗總本山大僧正

小泉 日慈和南

祝辭

日蓮聖人ガ、法華開顯ノ法門ニ據ラテ立正安國ノ大義ヲ説キ我ガ國運ノ隆昌ニ貢獻セラレタコトハ何人モ知ルトコロデアラウテ其ノ慈教ハ今モ御ホ強ク民心ニ生キテ居リマス。今回、長クモ我々爲聖人ニ立正大師ノ號ヲ追證セラレマシタコトハ、聖人ノ遺教ヲ傳ヘ聖人ノ法説ヲ信ズル諸君トモニ慶賀ニ堪ヘデルトコロデアリマス。ドウカ諸君ハ一層發奮精勵シテ益々法ヲ開發ト教風ノ宣揚トニツトメ、ヨク時代ノ要求ニ應ジテ立正安國ノ實現ヲ期セラレルヤウ切望致シマス。一言所懷ヲ述ベテ祝辭ニ代ヘマス。

大正十一年十一月六日

文部大臣 鎌田 榮吉

祝辭

建長五年日蓮、宗ヲ建テテヨリ約六百七十年茲歲其靈應顯國ノ法勳ニ依リ立正大師ノ號ヲ追證セラレ今日此儀ヲ見ル法華タル諸師ノ歡喜豈論ノモノニア、ベケンヤ

惟フニ十九世紀物質、化ノ餘弊ハ遠ニ歐洲ノ大戦亂ヲ惹起シ有史以來未ダ嘗テ有ラザルノ大患慘事ヲ現出セリ、是ニ於テカ種々ナル思想ハ澎湃トシ、起リ人生ノ意義國家ノ觀念ニ關スル我國ハノ思想亦漸ク動搖ヲ見ントシ世ヲ舉ゲ、大偉人ノ出現ヲ思フ切ナル秋ニ當リ眞理正道ニ對スル信念ノ堅コト誠ノ如ク發露斷乎トシテ百經ヲ恐レズ宗ヲ開キ國ヲ憂ヒ眞ニ法界ノ大觀ヲ極メタル聖人ニ對シ今日ノ

結賜アル尚ニ深甚ノ意誠アルヲ感ゼズンバアラズ香クバ自今以後國
家前途トシテ宗廟ノ風ヲ顯揚シ國ノ爲メ法ノ爲メ更ニ一層ノ努力ヲ
加ヘラレンコトヲ聯カ所感ヲ述ベテ祝辭ニ代フ
大正十一年十一月六日

東京府知事 宇佐美勝夫

祝 詞

日蓮聖人ハ我が宗教家中ニ於テ其ノ護國至忠ノ眞精神ニ最モ傑出セ
ル偉人ナリ、立正安國ノ主張ハ二十世紀ノ國際正義ノ思潮ト相契應
スル所少カラズ、聖人ノ精神ハ今後ノ日本ニ復活セシムベキ大ナル
意義ヲ認ム、然ルニ古來 朝廷未ダ大師號ノ 勅諡ナカリキ、今ヤ
時機到達ニ「立正大師」ノ號號宣下アルニ到リシハ予等國民精神ノ
傾向ニ思ヒアルモノノ深ク祝賀ニ堪ヘザル所ナリ、今日ノ盛儀ニ丁
リ一言所願ヲ述ベテ祝詞ト爲ス
大正十一年十一月六日

東京市長子爵 後藤新平

祝 詞

臨ンデ大師號宣下ノ盛儀ヲ祝シ奉リ妙法宣布ノ益々廣大ナランコト
ヲ祈ル
大正十一年十一月六日

大 養 毅

富士の裾野は春とし思ほゆ
雲とさす身延の山も晴れぬべし

日嗣の皇子の今日のみのりに

各地通信

▲金澤日蓮主義宣傳

本郷常次郎、窪田純榮兩師に依つて
左の如く諸所て夫々の日蓮主義宣傳講演會があつた。

- △十月三日午後八時於別所氏宅
- △同六日午後二時於中野氏宅
- △同十一日午後八時於松永氏宅
- △同十八日午後三時日蓮宗寺院及午後七時於長谷川氏宅
- △同二十日午後三時日蓮宗寺院
- △同二十一日午後三時本覺寺にて
- △同二十二日午後三時於本長寺
- △同二十六日午後二時本行寺及午後七時於本長寺
- △同三十一日午後八時於日蓮宗寺院にて

▲千葉縣常覺寺布教

△十月二日夜常覺寺に於て題目講「釋尊傳」中島元道師
△十月五日常覺寺に於て青年會例會「青年の覺悟」戸村眞一郎君
「農村問題」若塚太一君「人心の歸向」中島元道師

日蓮聖人に立正大師の號號ヲ賜リたるある日事あり
て新聞 載ける途次富士山を見 眺める歌及反歌三首
佐藤鐵太郎

正しさを、立てゝみ國の、安かれと、禱りし人を、
なつかしみ、高き尊み 照る月の、かけもかくろひ、
白雲も、いゆき徳ふ、富士の根を、ふりさけみれば、
浮雲の、影もあらなく 雪霜の 秋さり來れど、霞
たち、裾野が原に、春來らし 思ほゆるかも、見る
人の、奇み怪しみ、語らくを、聞くも宜なり、日の
本に、春は來にけり、かみな月、十あまり三つ日、
かけまくも、あやに畏さ、日の御子の、みのり畏み、
甲斐が峯に、年の緒永く、かくります、妙のみのり
の、今日よりは、幸はふ御代を、祝きて、まつろい
がてに、人みな、迷へる道の、説草を、なびかい
つゝも、言あげむ、時とはなりぬ、天地の、開けし
時ゆ、たぐひなき、幸にぞありける、我が日本も、

反 歌

天地もみのりのはえを祝ふらむ
富士の高根に浮雲もなし
雪霜の秋さり來れど霞たち

▲鳥取縣松崎本立寺布教

△十月一日、市橋宅に於て講話
「日蓮聖人傳」當日道

△十月六日夜、統一團青谷支部例會「日蓮主義綱要」當日道
主講者の態度」中島孝治

△十月十日午後、引地大壽寺に於て「信仰と生活」當日道
△十月二十日、本立寺に於て「信仰要義」當日道

▲千葉縣來光寺大師號記念祝

第三教區日來光寺に於て
は去る十一月三日午後一時より例年御會式を兼ね立正大師號就に就
て記念會舉行の豫定にて豫て來光寺々報第一號を發行し普く檀家に
配布したりしが定期に到り檀家前二宮長を始め來會者多數にて松
尾清明氏は立正大師號就御號に就て檀徒の心得べき要點を示し尚
法要等嚴肅に取行ないたり

▲吉美妙立寺奉祝會

遠州吉美妙立寺に於ては十月廿七八日
大師號就奉祝會を諸僧したり數日に亘る不眠不休の準備と絶好の
晴天に加へ十數年目にて當長親下御親修の事なれば檀信徒の喜び例
るに著なく未 有の盛況境内には數十の露店張られ當日の奉詣者千
餘正午當長親下は國友文學士松本布教師を隨へ鷲澤輝御若遊さる同
本山主は藤本執事檀家總代區長在郷軍人青年會を率いて奉迎入車を
連て山門に向ふや本堂に於ては大太鼓を打鳴らし御到着を報じ山門

より本堂に至る数丁は婦人會其他の奉迎者にて埋り新くて正一時祝下には大衆を隨へ奉祝大法要御親修親しく慶讃文を奉讀遊さる種家總代區長代表豐田吉吉、婦人會代表、三浦大輔の役係佐原高次郎氏等の祝詞あり終て講演國友僧正と祝下には、懇々として慈愛溢るゝ御親教に滿堂の参拜者を隨喜感泣せしめらる此時同寺經書の日曜學校生徒奉祝行列隊は藤本氏新作の讃迎歌を高唱し丁内を廻り山門に祝下御親教の終るを待ち方丈廣庭に正列祝下待て生徒の爲に一場の訓諭、賜ふ時正に暮色立正大師並に祝下の萬歳三唱にて開散其より授餅甘露等の饗應あり、次で夜の講演日曜學校生徒の若が代宗歌に始り聴衆五百有餘、管長祝下には、日蓮聖人の人格と願せられ二時間の御慈講に聴衆は水を打ちたるが如く熱心に聴聴し祝下も聴衆の熱心には非常に満足遊され其他檀信徒の一致團結の聲を御賞讃せられ同夜直に御西下遊されなり、十月十一日御經會法要講演開盤君が代宗歌の後藤本師は龍口法華に於て岡本山主は日蓮聖人と日本國、産坂中佐はシベリヤ民衆に就て一時同半の講演聴衆三百四十近來の盛會なり(藤本報)

常徳寺立正奉祝會

▲法園少年大會 立正大師證道宣下記念事業の第一歩として十一月十日午後六時半から法園少年團の大會を開盤したが、日没より既に少年、少女詰め掛け開會前には本堂内に宛然子供王國を造くつて立錫の餘地なく尙續々と増集するの盛況で開會の後藤と松永新愛知お伽團員のお伽團の終る頃は最早本堂に入場者收容するの餘地なく境内に何百の兒童立つて第一都開會を待つてゐた豫定の如く第

一部の活動寫眞を映寫し了ると會員を入れ替へ九時半第二都を終つたが一時は本堂の崩れるばかりの大盛況で立正大師證道宣下を卜して兒童の顔面に多大の印象を與へて散會した。

▲奉祝法會と改葬供養 翌十一日は午前十時より奉祝會と本山改葬供養を行ひ管長本多日生祝下の親修に依つて最嚴經に法會と改葬供養を了つたが參堂の善男善女を續いて入山し忽ち本堂に溢れ唱題の聲渾然と湧いて何れも感激して祖師の偉大な高徳を讚美し寂滅の精靈の冥福を祈つた法會後本多祝下の法話があつて何れも法

悦に満足し乍ら散會した

▲日蓮主義講演會 同日午後六時より日蓮主義講演會を開き陸軍少將野原雄閣下の「時局と立正大師證道宣下に就いて」及本多日生祝下は「立正大師の人格と主張」と夫れ／＼一時間餘に亘つて一

大雄辯を奮はれた聴衆約千五百何れも感激して散會した。

名古屋自慶會

名古屋自慶會十一月講演は本多日生祝下に依つて左の日蓮の如く夫れ／＼講演があつた十一月九日豐田鐵機「心の平」豐田鐵六「立正大師高風」十一月十日三葉内熱「先帝の御製を拜して」十一月十一日井「一步千里」十一月十二日小松製糖「慈悲と報恩」十一月十二日東洋紡「修養の三方面」十一月十三日切工場「一事を守れ」

▲東京本教寺の奉祝會 十一月十五日東京雜司ヶ谷本教寺に於て立正大師證道奉祝會を勤修した、東京府下の各寺院は隨喜参列し法要後野澤陸軍少將と笹川日堂僧正の講演ありて午後四時半開會

檀家及び附近の日蓮主義信仰者數百名の參會があつた。

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

法華經要文講義
大智度論卷之四

どは無くても宜いかも知れないけれども、中々さうはいかない、人生は次から次へと所謂四苦八苦に襲はるゝものなるが故に、精神の力を發揮して、外部の境遇が如何に變化しやうとも、精神の安樂を破らぬだけの修養鍛鍊を要するので、それを與へるといふのが釋迦の活動であつたのであるから、そこで皆苦を離れて安穩の樂を得せしめる。その安穩の樂の内容を二別すると、「世間の樂」と「涅槃の樂」といふ二つになるのである、唯安穩の樂といふことを精神的にのみ解釋したのは我が佛陀の眞意でない、そこで「世間の樂」といふものは、今日の所謂物質的といふやうな、低き慾望の方の幸福をも保障せんと努力したものである、だから博奕を打つとか、酒を飲むとかいふ事を如來は盛んに説いたが、それは何の爲かと言へば、左様にして財産が無くなれば

家庭の幸福も無くなるから、「不養生な事をしてはいかん」といふやうなことで、衛生に關し經濟に關し、種々なる點に於て人生の幸福を保全せんとし、釋迦は説いて居る、即ち世間の低き慾望から來る所の幸福をも保障せんとし、更に高い／＼理想的なる、崇高なる涅槃の樂をも與へんとした所のものである、決して釋迦は偏つた所の意味の精神生活だけをいふのではない、大體は精神に力を得んければ人生の幸福はないから、安穩の樂といふことは精神的であるけれどもその内容に世間の樂と及び涅槃の樂とを含んで、斯の如くお説きになつたものである。

四五、貴賤上下、持戒毀戒、威儀具足せる及び具足せざる、正見邪見、利根鈍根に、等しく法雨を雨らして憊倦な

し。

さうしてその救ひの方面が何處に及ぶかといへば、唯善人だけを救ふとか、賢き者だけを救ふといふのでなくして、丁度雨が如何なる草木をも潤すが如く、貴き者も賤しき者も、身分高き者も自分低き者も、如何なる者に對してもこの教を與へて之を指導し、少しも倦み勞れる所はなかつた、賢い者にも愚かな者にも善き者にも惡き者にも等しく法雨を雨らすといふので、この「正見邪見、利根鈍根」といふやうなことは實に法華經の理想を能く顯はして居る「惡き者にも」といふのは實に佛教の善い所である。「惡い事をする者は地獄に叩き落す」といふのではなくして、その惡しき者をも等しく法雨に潤してやらなければならぬといふに至つては、佛教は實に最高の宗教である。基督の「右の頬を叩かれたら左

の頬を出して叩いて貰へ」といふやうな、そんな言ひ方ではない。「正見邪見、利根鈍根に等しく法雨を雨らして憊倦なし」といふこの意味は、言ひ方に於ても能く整うて居るのであります。佛教が最高の宗教であるといふ事は、この一事でも能く認められる次第であります。

四六、佛の所説の法は譬へば大雲の一味の雨を以て、人華を潤ほして各實を成ずることを得せしむるが如し。

この處は今の譬喩とこの法とを併せて説くので、佛が御説法なさるのは、丁度譬喩の方で雲が起つてそれが雨になつて草木を潤ほすと説いたと同じ事で、佛は雲であり、説法は雨であり、衆生は草木である。だから人間を華に譬へて「人華を潤ほして」

と言つて居る、衆生には佛性の當體蓮華の華がある故に、これに妙法の雨を降らして、當體蓮華の華を潤ほして各々その實を成ずることを得せしめる、佛の説法は法の雨であるといふ事を説かれたのであります。

授記品第六

この品は中根の人が成佛の印許を受ける事が書かれて居る。

四七、我が此の弟子摩訶迦葉は、最後身に於て佛に成ることを得ん、名を光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御、丈夫、天人師、佛世尊と曰はん。

四八、國界嚴飾して諸の穢惡瓦礫荆棘便利の不淨無く、其の土平正にして高下坑坎堆阜あること無けん、瑠璃を地と爲し寶樹行列し、黄金を繩となして以て道の側りを界ひ、諸の寶華を散らし周徧して清淨ならん。魔事あること無く、魔及び魔民ありと雖も皆佛法を護らん。

この所はその光明如來になつた時の淨土がどんな有様かと言へば、其處は實に美しい、この經文のやう

に、いろ／＼な穢ない物は少しも無い、綺麗な所であるといふことが説いてある。この中に注意すべきは「魔及び魔民ありと雖も皆佛法を護らん」といふことである、悪魔があつてもこの光明如來の世界に於ては悪魔が降伏をして佛法に味方をするやうになるといふ、これも佛教の徳の方の理想を現したものである。何處までも佛と魔が對抗的でなくして悪魔のやうな者さへも漸次に化して正法を護る人になるといふことを示して居る、これも今後の人生の闘ひに於て非常な大事な點であつて、如何に危険な思想に囚はれ、罪惡に陥つた者でも、之を教化して行けば、遂に正法に歸依して世は平和の春を迎へ得るといふ信念に立つていかなければならぬので、甲乙互に殘害を恣にして行つたならば、遂に人生は暗黒と成り終るのであるから、法華經は非常な淨い信念

を以て、悪魔も佛法を護るといふことを示した、斯ういふ經文は他に無い大理想であります。であるから、日蓮聖人も第六天の魔王までも御本尊の中に書かれた、あれ等の事もやはり魔が佛法を護るといふ意味を現したものである。之を人間の世の中に持つて來れば、如何なる惡人も亦改心して正義に基くことを認めるのである。そこで提婆の成佛を顯はし、或は鬼子母神の法師を守護することを説いて、法華經は、最早や取柄の無い捨て果てた者と雖も、尙ほそれを活かして來たのである、これも亦大事な點であります。闘ふ時分には何處までも強く正邪を明かにして闘つて行かなければならぬ、正義を確立する上に於ては嚴正でなければならぬが、その正義が十分に打立てられたならば、それに依つて他を救済し、それを包容して行く時分には、如何に反對した者で

も、悪魔の末までもこれを愛して、保護を與へて行く程な大慈大悲を現はして居る。日本國の理想天職も亦この法華經と同じであり、又同じやうに導かへべきものであると信ずるのであります。

四九、若し我が深心を知しめして授記せられなば、甘露を以て灑ぐに熱を除いて清凉を得るが如くならん、飢へたる國より來りて忽ちに大王の膳に遇はんに、心猶ほ疑懼を懷いて未だ敢て即便ち食せず、若し復王の教を得て然して後に乃ち敢て食せんが如し。

この處は今授記を與へられれば、甘露を以て灑がれて熱を除いて氣分が快くなるやうになるのである

が、併し今法華經に於て殆んど佛の記別を與へられるかのやうになつて居るけれども、ほつきりその言葉が無いために自分に不安を感ずる、丁度飢饉の國から出て來た者が王様の召上るやうな御馳走の前に据えられたけれども、「これはお前が食へても宜い、お上んなさい」といふ許を受けないものであるから、黙つて手を出すのも行儀の悪い譯だと思つて腹の減つて居るのを堪へて、眼の前に御馳走を見ながら饑渴に迫つて居るやうな有様である。それを若し王が許して與へて「サア之をお上んなさい」といふことであれば喜んで食するやうなものでモウ吾々は今は佛の記別を與へらるべき者だとは思ふけれども、その言葉が無い爲に非常に心苦しく考へて居る譯であると言つて、記別を與へられんことを請うた經文であります。能くお盆の施餓鬼などの旗に書いて居

るのがこの言葉で「如以甘露澀、除熱得清涼」
如從飢國來、忽遇大王膳」といふこの四句を旗
に書いてお寺の施餓鬼に立てゝあるが、この譬諭が
頗る宜しいと思ふ、甘露を以て澀がれると言ひ、飢
饉の國より來るといふのは、宗教の法悦を言ひ現は
した言葉としても宜しい。熱惱に苦しめられて居る
所に、甘露を與へられて清涼を得たるが如く、或は
いろ／＼な慾望に渴して悶へて居るのは丁度飢饉に
遇うて居るが如く、今日の人心が不安であるといふ
のは、物質にも飢饉であるけれども物質ばかりが不
足して居るのではない、精神が物質以上に飢えて居
る、それを即ち飢饉の國より來て大王の膳に遇ふが
如く、法華經といふものはこの渴したる人生に飢饉
の國に居りし者に大王の御馳走を與へるが如き教で
あるといふ意味に於て、非常に立派な經文であると

思ひます。

五〇、大雄猛世尊常に世間を安んぜんと欲す、願くは我等に記を賜へ、飢へたるに教をまつて食するが如くならん。

これは世尊を讃歎した經文であります、釋迦如來を大雄猛世尊と申上げた、佛様は優しいと言はずして、非常な勇氣のある猛々しい方であるといふことを言ひ現して居る。さうして死んでから先きなどと言はずに「常に世間を安んぜんと欲す」て、奮闘的に人生の罪を滅して、人を皆道德の人たらしめ、煩悶を打破つて幸福の人たらしめる爲に闘つて居る、その勇しい佛様といふので「大雄猛世尊常に世間を安んぜんと欲す」、斯ういふ工合に佛を意識して居

るのである。今の日本佛教の大部分の人のやうに、釋迦は未來觀のものぢやとか、唯だ柔和しい人ぢやといふやうな風に見るといふことは、佛教を知らないていふ民間の想像である、釋迦如來に對する佛教徒の意識は明かに斯ういふ風になつて居る。願くは我等に記を賜へ——どうぞ佛に成る許をお與へ下さい、さうすれば「飢へたるに教をまつて食するが如くならん」これは前の所と同じ事で、この「五〇」の符號の下は、前の二句が最も宜しいと思つて摘出したのであります。

これ中根の人達の爲に、譬諭品の所で譬説といふ釋尊の説法があり、信解品に於て四大弟子の領解があり、藥草論品に於て釋尊の遠成があり、授記品に於て記前があり、これ中根の者の一段が済んだのであります。これから下根の者に對して、更に親

切に大通如來の因縁および化城の譬諭を擧げて、開權顯實の事を詳しく説きになり、それから五百弟子授記品と授學無學人記品に依つて記前が與へられそこで下根の者の一段落がつくのである。即ち方便品第二から興つて人記品第九に至る迄に、上中下の三根が開權顯實といふ法華經の大理想を領解した。第十の法師品から以下は、佛の滅後、法華經を宣傳する大事に移つて之を説き、種々の變化を経て遂に壽量品に至つて本佛を顯本し、神力品に於て上行菩薩に附屬をすることになつて、法華經の品目相關聯して終り勸發品に至るのであります、先づこの授記品第六で中根の記前が了つて、これが一段落となつて居る、更に人記品第九まで行けば法華經の三周説法が終りを告げることになるのであります。

化城喻品第七

化城喻品は三周說法の中の因緣說法と稱する一段で、即ち上中下の三根の中には、下根の輩を救はんが爲に、開三顯一の法門に關して大通智勝如來の昔の因緣を擧げて之を教へ、又化城實處の譬に寄せて之を諭されたのがこの品の大意であります。故にこの化城喻品の二大教義としては、大通王子の因緣、化城實處の譬諭、この二つが骨子となつて居るのであります。

大通王子の因緣といふはどういふ事かと言へば、釋尊の時より三千塵點劫と稱する以前に國王があつて、それが發心して佛にお成りになつた、所が國王の時に王子が十六人あつて、それが又同じく父に隨つて發心をして、菩薩の行に入つて、各々大通如來

の法華經を説き給ふのを聽いて非常に感奮をして、何れもその持場を定めて、法華經に依つて衆生教化をして居られた、之を「王子の覆護」と申して、佛より教はつた事を反覆してお説きになつたのであります、それが即ち法華經である。さうしてその菩薩の行の結果として十六の王子は何れも國を擇んで成道を遂げて佛に成られた、その時、他の十五人の王子は何れも他の世界を擇んで居られるに拘らず、第六番目の王子がこの娑婆世界を擇んで成道を遂げられた、それが即ち今この法華經を説きつゝある釋迦自身であると云ふ事を言はれたのであります。

この中にどういふ意味が含まれて居るかと言へば、今の釋迦如來が特に娑婆世界に縁が厚いと云ふ事と、さうして既にその關係が三千塵點劫の久しき以前より結ばれて居るといふ事が茲に現はれたので

大僧正本多日生師講述

那先比丘經通解

慈悲が働いて居る、而してその相は微妙でなければならぬと云ふ、眞善美結品の實在論として現れる三體哲學として組織しなければならぬのである。然るに日本にはさう云ふ學者の無いのは甚だ遺憾に思ふ。實際佛教は哲學よりも進んで居るのであつて、寧ろ哲學は後れて居るのである。

王又那先に問ふ、郷曹沙門の言ふ、人世間に在つて惡を作し百歳に至るも死せんと欲する時に臨み念佛すれば、死後皆天上に生ずと、我れ此の語を信ぜず、復言ふ、一生を殺さば死して即ち泥犁中に入ると、我れ是を信ぜざるなり、那先王に問ふ、人小石を持つて水上に

置くが如し、石浮ぶや没するや、王の言く、其の石没す、那先の言く、百枚の大石を持つて船上に置かしむるが如き、其の船寧ろ没するや否や、王の言く、没せず、那先の曰く、船中百枚の大石船に因るが故に没することを得ず、人本惡有りと雖ども一時念佛すれば、是を用つて泥犁中に入らずして、便ち天上に生ぜん、其の小石の没するは人の惡を作すが如し。

この一段は佛を念ずる功德の宏大なるを説いたのである。唯佛を念じて何になるかと云ふけれども、佛を念ずる事に依つて宏大なる功德を得られる、簡

單に言へば念佛である、淨土宗眞宗の爲に念佛と云ふ言葉に汚れを生じたのは遺憾である、眞の念佛は釋迦牟尼佛を念ずるのである、佛教徒は先づ釋迦牟尼佛を念じ、釋迦牟尼佛の教を信じ、その教を傳ふる人を先覺者として尊敬するのは當然の事である。

王が又那先比丘に問はれるには、御身等沙門の言ふには、人が世の中にあつて悪い事をして百年まで生きても、死なうとする時に臨んで佛を念じ奉れば死後に皆天上に生れる、だから少々悪い事をして佛を念じさへすれば宜いと言ふが、私は是は信ずる事が出来ない、復た重ねて言ふには、一つの生物を殺してさへも死んだら地獄に墮つると言ふ、此事も私は信じない、佛を念ずれば總ての惡を滅ぼし、一寸したものを殺しても地獄に墮つると言ふのは私は信

つて教はれる、その教ふ途がなければ宗教はないのである、唯この事を一方に偏して、どんな悪い事をしても死ぬ時に念佛すれば宜いと思ふのは非常な間違である、このお經は前に念善を説き、その他の道徳を説いて、而して今茲に誤つて惡を爲したる者を救済する途としてこの問答が起つて居るのである。この事がなければ誤つて惡を犯した者が救はれる途がないのであるから、日蓮聖人は釋尊の因行果徳の功徳を譲り與へ給ふと言ふのもこの點であります、唯念佛に依つて救はれるから惡を作しても宜いと言ふやうな左様な意味があつてはならぬのである、この世の中に於て惡を全滅することはなく、出來ない、思はぬ過ちを爲すものであるから、懺悔の心を懷き、改悟の心を懷き、益々努力して正しき道に進むのであります、この事を否定して道徳萬能

することが出来ない、斯う彌蘭王が言つた、その時に那先比丘が王に反問して言ふには、人が小さな石を持つて水の上に置いたとしたならば、その石が浮ぶかどうか、王が言ふにはその石は浮ばない、沈んでしまふ、那先が言ふに、百枚の大きな石を船の上に置いたらどうか、その船は沈むであらうかどうか、

王の言はれるには、それは沈まない、那先が言ふに、「船中百枚の大石、船に因るが故に沈むることを得ず」その通りで、人に悪い事があつたからと云つて、佛を念ずる心になつたならば、その功徳に依つて、地獄に墮ちずして天上に生れることが出来る、小さい石の沈むるのは、人が悪い事をして何等頼る所の無いやうなものである、小さい悪い事をして佛に救はれるのは是は勿論であるが、大きな罪を犯してもそれが爲に懺悔して佛を念ずれば、その功徳に依

て行くのも淺薄である、又佛を念ずれば道徳上の責任無しと云ふのも誤まつて居る、そこを誤らないやうにして行く所に佛教の意味がある、那先比丘がこの兩方の意味を説いて居るのが尊いのである。禪宗坊主のやうに、坐禪をして居れば佛はどうでも宜いとか、淨土宗のやうに、佛を念ずれば道徳はどうでも宜いと云ふのは、皆是れ偏して居るのである、彼等は那先經一卷も讀んで居ないのである。

王復那先に問ふ、人幾事を用いて道を學知せん、那先の言く、七事を用いて道を學知せん、何等をか七と爲す、一には善惡の事を念じ、二には精進し、三には道を樂み、四には意を伏して善を爲し、五には道を念じ、六には心を

一にし、七には適くとして憎愛する所無し、王又那先に問ふ、人此の七事を以て道を學知するや、那先の言く、悉く七事を用ひて道を學知せず、知者は時に善惡を知る、是の一事を用ひて別知せんのみ王又那先に問ふ、假令一事を用ひて知るとならば、何の爲ぞ七言を説くや、那先王に問ふ、人の刀を持し鞘中に著け壁に倚るが如し、刀寧ろ能く自ら割截する所有らんや否や、王の言く、割截する所有る能はず、那先の言く、人心明かなりと雖も、會々是の七事を得て共に智を成すべきのみ。

この一節は、佛法修行に就て正助の二行がある、その中心修行とそれを援助する修行との二つの關係を心得なければならぬ、一番長い所だけやればそれで宜いと云ふのではない、又援助する修行をやればそれで何もせんとも宜いと云ふのではない、其等の關係を茲に明したのであります。

王が重ねて言はれるには、人はどれだけの事を用ひて佛道を學び得るのであるか。那先答へて言ふに七つの事から先づ心得て行かなければならぬ、それに依つて道を學び得るのである。その七つの事とはどう云ふのであるか、「一つには善惡の事を念じ」、是は善い事惡い事を鑑別けやうと常に心掛けるのである。「二には精進し」、その善と認めるものに向つて精進するのである。「三には道を樂み」、餘儀なくやるのでなくして、自分の精神から善い事をするのを悦ぶ。

「四には意を伏して善を爲し」、所謂劣等の慾望を抑へて善を爲す、常に自ら心を折伏し自ら心を指導して行かねばならぬ。自分の心には高い心と低い心善い心と惡い心とが働いて居るから、常に善き心を以て惡い心を導くやうにして行かねばならぬ。「五には道を念じ」、自分が爲し來つた所の道を心から忘れぬやうに、常に憶念してその道を味ふやうにして行かねばならぬ。「六には心を一にし」、前にあつた通りに心を統一して散亂するを防ぐ。「七には適くとして憎愛する所無し」、何事にも偏頗の心を以て彼を憎み此を愛すると云ふ事のないやうに、囚はれたる者を無くしなければならぬ。この七つの事を修むれば佛法の修行は成立つ譯である。王又那先に問はれるには、人はこの七つの事を以て道を學び盡すことが出来るのであるか。那先答へて、この七つの事を悉く

學ばなくても宜しい、その中の一つで間に合ふこともあるし、三つ四つ併せて用ひることもある。「智者は時に善惡を知る」、眞に偉い人であれば、その場合その場合に依つて善惡を知ると云ふ一つで一切が間に合ふのである。王又那先に問うて曰く、縱令一つの事を用ひても一切間に合ふと云ふのなれば、どうして七つの事を説いたのであるか、一つで間に合ふ事なれば一つだけ説けば宜いではないか。那先が申すにはそれは人が刀を持つて鞘の中に入れて壁に掛けて置くやうなものである。「刀寧ろ能く自ら割截する所あらんや否や」、刀が獨りて鞘から飛び出して物を截る事があらうかどうか。王曰く、それは刀が自分て鞘から飛び出して物を截る事はない。那先の言ふには、人の心如何に明かであると云つても、唯明かなる心と云ふだけでは心は成就しない、「會々是の

七事を得て、矢張り前に言つた七つの事柄を併せてこそ良いのである。良い刀も劍道を修行して後に持つてこそ始めて他を自由に斬る事が出来るやうなものであるから、一番良い所だけではないかぬ、矢張りそれを行ふに適したる、働を修養して行かなければならぬ。是が佛法修行の正行、助行である。中心の修行と之を援助する修行である。この正助二行を併せ行じてこそ目的が達せらるゝのである。

那先の言く、夜已に半す、我れ去らんと欲す、王即ち傍臣に敕す、四つの端氈を取り、布を畳して油麻中に置き、持し以て炬と爲し、當に那先の歸るを送るべし、那先に恭事すること我が身に事ふる如くせよ、傍臣皆言く、教を

受くと、王の言く、師を得る那先の如く、弟子と作つては我が如くせば、道を得ること疾かならん。

この最終の一節は師弟の情誼を明したのであつて、之も佛教徒の學ぶべき點であると思ふ。

那先が申すには「夜已に半す、我れ去らんと欲す」段々話をして居つてもう夜も更けて來ましたから、私は是でお暇したいと思ひますと申上げた。王は即ち傍に居つた家來に四つの美しい敷物を取り出させ、又布を麻の油の中に浸してそれを以て燈火として那先比丘を送れと言ひ附けられた。赤毛氈を敷いて、良い香のする麻の中に布を浸して燈火として送らせて、さうして尙言ふには、お前等が那先比丘を送つて行くに尊敬する態度は、王に事へると同様

に、絶對の敬意を拂つてお送りしなければならぬと言つた。すると家來が皆申上げるには、仰せの通りに致します。王が更に言ふには、是は非常に悦んで言はれるのであります。師を得る那先の如く、弟子と作つては我が如くせば、道を得ること疾かならん。那先比丘のやうな師匠はなか／＼得られるものでない、佛法の疑問に就ては快刀亂麻を斷つやうに説き教へる、是でなければいかぬ、又弟子としては自分のやうに聞いた事は一生懸命に守つて、師匠を敬ふと、斯の如くにして行けば、間違なく疾かに佛道を成就する事が出来るであらうと、師弟の範を示しその情誼を教へられたのであります。

茲に一言したいのは佛教が世道人心に裨益する所あるは洵に明白なる事で、那先經一つに依つてもその事を證明し得るのである。然るに我國の識者階級

に於ては、佛教の世道人心に益することを知らないで、頻りに僧侶が腐敗して居るとか厭世主義だとか獨善主義だとか言つて居る。彼等は皆淨土宗や禪宗のやうなものを以て眞の佛教と思つて居るから間違つて來るのである。日蓮聖人は七百年前にその事を大聲疾呼して居るのである。その間違つて居る事を叫んだ時分には、日蓮はあれは意口を言ふのだと云つて居つて、今度は佛教は獨善主義だとか厭世主義だとか言つて居る、實にその愚さ加減が分らない。この經文は洵に平易明晰にして佛教の主要を教へるには最も適當なるものであり、特に珍重すべきものであると私は信ずるのであります。

更に驕つてこの經の五重玄義を申します。

第一に釋名を申しますれば、那先比丘經と題したのは、那先比丘が舍衛國の國王憍蘭と問答して、之

を教化した事柄が書いてあるから、その法師の名を取つて那先比丘經と題したのであります。無論この那先比丘は佛滅後の人である。それは經の本文に於て、問答の大切な場所に行くと必らず「佛經に説いて言ふ」と言葉を挟んで立證されて居る。即ち自分の論旨を確める爲に釋尊の經典を引用されて居るのである。是に依つて觀れば那先比丘は佛滅後の人である事は分るのである。

又那先と彌蘭との因縁に就ては、この經の初めに掲げられて居るのである。即ち前世に二人の知己があつて、それが再生して一人は彌蘭王と稱して舍竭國王となり、一人は沙門となつて那先比丘と稱するのである。所がこの沙門が生れた日に、その家の象も矢張り子を生んだ、その象の生るのに先立つて子供が生れたと云ふので那先と名を附けたのである

「那」と云ふのは印度に於て象のことである。その那先比丘が年十五六の時、舅父は羅漢道を成就した人であつたから、その人の弟子となつて大いに學んで、年二十歳に至つて和戰寺の額波曰と云ふ羅漢の聖者に就て學んだ。けれども那先は未だ羅漢の悟を成就することが出来なかつた。その時に同輩の沙門は皆羅漢の聖者となつて居たので、師匠の額波曰が「お前一人羅漢道を悟つて居ないから、恰度白米の中に黒米が雜つて居るやうなものである」と言つて非常に卑しめたのである。そこで那先は大いに慚ぢて列外に出て「自分は羅漢道を成就しなければ再び列座に加はらない、恰も狐や狗が獅子の群中に居るやうなものである、洵に慚かしい」と言つて非常な決心を示した。師匠はその頭を撫て、「汝にその大決心があれば遠からずして必らずや羅漢道を成就するて

あらう、何も心配することは無い」と言つた。彼は又額波曰の外に佛法の教を受けて居つた師匠が一人あつた。その人は老人であつて九十にも近い人で、伽維曰と云ふ。所がこの伽維曰の信者に非常に立派な人格の人があつて、その信者の所へ伽維曰が彼を使にやつた。「お前あの信者の宅に往いて食物を求めて來い、併し行きしなに口に一ぱい水を含んで行け、さうして歸るまでその水を失はないやうにせよ」と言ひ附けた。そこでは口が利けないから用事が辨じない、洵に無理な事のやうであるが、さう云ふ命令をしたのである。那先は水を含んで信者の宅に出掛けた所が、その信者から「折角お出てになつたのであるから、どうか佛法の話をして貰ひたい」と熱心に請はれたのである。那先が考へるには、師匠の言ひ附けは、含んだ水を歸るまで失つてはならぬ

と云ふのであるから、他に往いても語ることを禁じたものであると思ふ、併ながら、優婆塞が心清淨にして法を説いて呉れと願ふにも拘らず、師匠が水を含んで歸れと言つたからとて、佛弟子たる者が法を説かぬと云ふ事はない、是は師の命には背くやうであるが、法を説いて呉れと云ふ懇請は重いから、寧ろ水を吐き出して法を説くべしと決心して、その信者の處に於て佛法の行要を説いたのである。その信者は大いに悦んで洵に有難いと言つて感謝をした。その時に那先は不思議にも須陀洹道と云つて羅漢道に進み行く道程の悟を得た。併し用を辨じて歸つて來ると師の伽維曰は非常に怒つて、吾が言ひ附けた通りにしない懲らしめだと言つて彼を破門して放逐した。そこで那先は益々決心堅く、終し師の破門を受けても必らず羅漢道を成就しようと、深山に

入つて晝夜間斷なく精進した爲め、遂に阿羅漢道を成就することが出来て、徹視徹聽することなき、普通人には視えない聴えない事でも誤りなく視聴くことの出来る、今日で言へだ千里眼の如き通力を得たのであります。斯うして彼はその後諸所を遊歴して衆生を教化しつゝ、舍竭國に來た。その時に過去の友人であつた一人が國王彌蘭と生れて居つたから、その因縁がそこに遭遇して問答をすることになつたのである。この「比丘」とは梵語であつて、佛弟子中の男の僧侶を稱するのである。その義理は色々の義理もあるけれども、先づ清き生活者と譯して居る。左様な譯でこのお經を那先比丘經と名付けたのである。

次にこのお經の本體は何であるかと云ふと、佛經に共通して居る所の原則を基礎として之を顯さうと

したものである。元來日本の宗派は、佛敎の大綱と共通とか、本義を忘れて、枝から枝に分れて、部分の事を取つて宗派を立てたやうなものがあるが、此等は大なる間違である。譬へば醫者の中には眼科とか産科とか色々の専門があるが、それとても一般の道理を學ばないで、唯眼科だけ産科だけをやつて居つたものは矢張り碌な醫者は出来ない。各々その専門はあるにしても、或る共通の原理を修めずして唯一部分だけの事をやつても到底うまく出来ない。日本の宗派の弊害は、佛法の綱要を忘れて枝葉に走つて居る點にあると思ふ。故にこの經の如く、佛敎全體に通じたる思想を明かにするのは、日本の宗派の弊害を矯正する上に於て適切なる効果があると思ふ。

所が佛敎は廣い敎であるから之を結束して、その

通則を押へようとする、そこに異論が起り易いのである。けれどもその全體の要義、佛敎の綱領は最も簡單平易に顯はすことが極めて大切であると思ふ。然るに日本の佛敎徒の多くは、佛敎は深いか廣いか、なか／＼話せないとか、容易でないとか、コケ威しのやうな事を言つて居つて、簡單明瞭に話せば斯う云ふものである、併し更に一段委しく言へば斯うだと云ふ風に、先づその綱領を提げて話すことの出来なくなつたのは、是は佛敎學の退歩である。而して今日世人は、佛敎が枝から枝に分れて居る爲に適應する所に迷うて居るのであるから、佛敎の綱領は斯の如きものだ云ふ事を成べく包括的に、偏寄らない意味に於て簡單平易に、何人にも領解せしめるやうにするのは、佛敎を向上せしむる最も近路であると思ふ。その點から考へると、このお經は頗

る簡單平易に佛敎の大綱を領解されるのである。即ち經中に六善事を掲げて、是が佛敎であると云ふ事を斷言して居る。六善事とは誠信、孝順、精進、念善、一心、智慧である、是だけの意義が整頓すれば佛敎は能くそれに包括せらるるものである事を斷言して居る。この六善事は餘程能く纏まりが附いて居ると思ふのであります。故にこのお經の本體は、今言ふ六善事であるが、それは佛敎の通則を掲げて居るのであるから、約言すればこのお經は佛敎の綱要を的示したものであると言ひ得らるゝのである。第三に明宗、即ちこのお經の實行の要路は如何と云へば、前に述べたる六善事を實行する事、それが要路であると云ふことになるのである。このお經の中に道要とか要言とか云ふ言葉が使つてあります、是は宏大なる佛敎の綱要を的示せんとして居る

のであつて、即ち六善事を綱要とし、それを實行する時に佛教の目的が達し得らるゝのである。

第四に論用、このお經を實行せる結果は如何なる效能があるか、それは六善事が大體であるけれども、その他に佛教の尊い意味合を附加へて話してある所が澤山ある。或は師弟の關係とか、或は道を求めた場合には自ら往つて法を説くとか、其等は何れも皆善き教化である。それを實行すれば善き効果が擧つて来る譯であります。佛教の綱要が極く簡明に領解せられたならば、それに依つて佛教の紛亂とか混雜は除かれるのである。又華嚴宗なり真言宗なり天台宗なりの學説は、専門の研究家が之を弄ぶのみであつて、活ける人心を教化する力は失つて居る。此等は宗教としての作用は滅びて居るのである。それは何故かと云ふと、餘り細かな理窟に囚はれ煩瑣な議

論をこね廻す結果である。故に斯の如き簡明平易なる經典の意義が普及すれば、佛教の紛亂を防ぐと同時にそこに活き々々せる力を生じて来るのである。この事も餘程考へねばならぬので、日本に於て天理教と云ふやうなものが相當勢力を得て得るのは、兎にも角にも簡明平易にして人心の機微に觸れて居るからである。苦痛を除き罪惡を除き、そこに一種の力と光とを與へる事を、眞つ先に人心に打ち込んで行く所からあつた云ふものが現れたのである。佛教は高遠なる哲學である事は長所であるが、又それが短所である。さう云ふ深い高い方面もあつて宜いけれども、一面には應用の上に簡明平易な所がなくてはならぬ。併し簡明平易であるからとて、淨土門のやうに、道德を無視して單に信仰のみと云ふのも、是も亦簡明に失して遂に佛法の本旨を失うものである。

る。この那先經の如きは、六善事を掲げて、簡明であると同時に、頗る能く色々の方面が應用されて居る。そこにこのお經の效能があると思ふのであります。

そこで第一に相手が國王であることも意味深いのである。國王が先づ佛教の教化に服すれば、その威徳の及ぶ所國內の人心に至大の影響を與へるのであるから、普及し易い次第である。さうしてその結果は何處に現れるかと云ふと、中正なる行ひを得られると云ふ事である。この中正なる行ひを獎勵することと依つて劣等なる慾望に墮落するとか又人生を悲觀するやうな左様な世俗の迷ひと小乗の迷ひとを打ち破る事が出来、更に現代も之に依つて濟はるゝのである。現代の文明は確かに中正を失して居るのである。今日やかましく論議せられて居るデモクラシ

の問題でも或は辯護し或は非難する所孰れも中正を失して居るのである。要するに或る事柄に對する反動である。西洋文明の行き方は必ず反動である。又反動で宜いと云つて居る。左様な事ではこの人生は永遠に安定を得ないで常に動搖を免れぬのである。このお經に於ては中正を論じて居る。この中正と云ふ事は、文字から觀ても非常に立派の義理があるのであります。而して人身觀を確立してそこから凡らゆる道德を實現しようとするのであります。日本の道德の淺薄であるのは、人身觀を確立しないで、唯必要であるから斯う云ふ事をやると云ふ目前主義の道德をやつて、寧ろ人身觀を侮蔑してやるから動搖を來すのである、是亦間に合せの弊害である。西洋は偏寄る弊害、日本は間に合せの弊害である。このお經は人身觀を打ち立て、そこから德行を導き、

而してその徳に依つて圓滿なる人生を實現せんとするのてあります、勞働者の味方であるとか、貧乏人の味方であるとか、偏寄つた事を言ふのではない。富める者も貧しき者も、低き者も、皆之を圓滿に調和する理想から起つて居るのである。このお經は淺薄なやうに見えるけれども、この點一つでも非常に大きな真理を顯して居るのである。

多く佛教を見る人の誤解を起すのは、安心立命と云ふのは獨善主義であると言つて攻撃するのである。けれどもそれは間違つて居る。自ら修養を積むけれども、その自己が完成された時には、今度は他に向つて大活動を起すのである。この一人を良くして而して全體を良くしようと思ふは、是は非常に良い考へ、デモクラシーの思想の取り柄はそこにある。唯全體を良くしようと思つても一人が良くならな

れば全體が良くなつて來ない。即ち社會國家人生と云つた所で、皆是れ個人の集合體の原素であるから、その集合體の原素を成して居る個人が不良な者であつたならば集合體が良くなる筈がない。故に全體の爲にするにも先づ個人の人格の修養が大事である。釋尊の教訓には個人的教訓が多いと思ふけれども、それは矢張り全體の爲にも考へて居るのである。仁王護國經の如きも、國を護る事、即ち全體を護る事を以て教の本を立てて行くのである。而して全體を護るには先づ個人の教化を重ねなければならぬ。個人の教化に重きを置いてあるから、社會を忘れて居るとか國家を忘れて居るとか、或は獨善主義であると思ふ事は決してない。論語でも孟子でも、先づ智仁勇を教へ、身を修める事を教へて、而して治國平天下に達せんとするのである。この修身齊家から

出發すると云ふ事が大切である。初めに修身齊家が説いてあるから獨善主義であると言ふならば、それは非常な僻論である。儒者は好んで佛教の惡口を言はうと思つて居る、故に自家の説と同じ事であってもそれが佛教の説であると惡く言ふのである。このお經にはさう云ふ點も能く示されて居るので、中正と云ふ事に依つて世の中を良くしようと思ふ理想が明かに出て居るのである。即ちこのお經の及ぶ所は、個人としては人格を向上し、全體としては圓滿なる人生、國家を實現して來る意味があるのであるから、僅なお經のやうであるが、是が十分に能く行はれたならば、その効果は實に偉大なるものがあると思ふ。

第五に判教、是は小乘大乘の別を立てる判教から觀ては合はないのである。大乘小乗の分類は各

々偏する人が區別したものであつて、佛教の本體から云ふならば、判然たる區別の附くべきものではないのである。このお經には羅漢道なる言葉が使つてあるから小乗經とも云へるが、又小乗經ならざる所もあるのて、寧ろ大乘小乗の區別を認めない意味のお經である。一面には普通に小乗と云ふ羅漢道を擧げて居るけれども、佛身觀を論じては常住の佛陀を擧げ、佛性を論じては明月珠の如しであると説いて居る。又空見を捨て、有を信じ、今世あり後世あるを信するのて、決してこの世を夢とは見て居ない、即ち極端的の主意が高潮されて居る。更に個人の安心に就ても、利他度世に關係のある點を明かにし、又精進の徳を力説せられて居るから、退嬰的のものでもない事も分る。随つてこのお經の全體には大乘的の氣分が漲つて居るのである。併ながら決し

て大小乗の區別を力説しない、寧ろ斯う云ふ風に會通して居る思想は、確かに是は佛教の健全なる方面であると思ふ。この思想の完結を告げて居るものが法華經の開顯統一の思想である。このお經の思想は不十分ではあるが法華經の開顯統一の思想に味方して居る思想である。維摩經杯の如く大乘小乗の區別をしないで、この經の如く佛教の高き理想と結び付くやうな思想、是が今後益々發揮されると思ふ。

尙この經に於ては、區々たる判教と云ふやうな事を言はないで、佛教の全體を纏めて簡明に説かうと努力して居る、この着想が非常に尊いと思ふ。今後この方式でなければならぬと思ふ。小さな問題を論じて、段々それに議論が生じて、僅の違ひで各派が分立するやうな議論はつまらぬと思ふ。今日佛教が衰頹して居るのもそれが爲である。支那が世界的

位置から非常に危険な状態にありながら、矢張り南北の争に依つて互に衝突をして居るのは、隣邦の吾々は如何にも淺ましい事と思ふ。佛教の狀態が正にその通りである。唯内輪の争ばかりして居つて、肝腎の佛教の本旨をお留守にして居る。吾等はこの那先經に依つて教を受けなければならぬと思ふ。將來佛教の復活を圖ると云ふ着想をするには、この那先經の如き行き方を參考として大いに學ぶ必要があると思ふ。私も大藏經要義の完結になつた後、この問題に就て書いて置きたいと思つて居る。從來の判教と云ふのも宜いけれども、まだ／＼新しい判教を講ずる餘地がある。一經の判教を書いたならば一宗の祖師となるやうなものである。大體の考は持つて居るが、いや二三年先にそれを書いて見たと思つて居る。

之を以て那先比丘經の講述を了ります。

本多日生猊下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
- 日蓮主義初步 金七拾錢
- 日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢 (品切れ)
- 國民道德と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢 (品切れ)
- 日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
- 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
- 國民教化 金貳圓貳拾錢
- 法華經の伴 金貳圓貳拾錢
- 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
- 聖訓要義 各卷壹圓貳圓貳拾錢
- 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
- 聖語錄 金貳圓八拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 法華經講義 以上各送料一部金八錢

○大藏經要義

○法華經要文

○佛教信仰の正統

以上購讀希望の方は左記へ申込るべし

東京市外品川町妙國寺内

大藏經要義刊行會

振替東京三一五九六番

| 料告廣 | | 價定一統 | |
|-------|----|--------|------|
| 一 | 冊 | 金壹拾錢 | 送料一錢 |
| 一 | ヶ年 | 金壹圓貳拾錢 | 送料共 |
| 一 | 頁 | 金拾錢 | |
| 一 | 頁 | 金六圓 | |
| 一 | 頁 | 金壹圓半 | |
| 四分ノ一頁 | | 事の金前 | |

大正十一年十一月廿七日印刷納本 (第三百三十五號)

大正十一年十二月一日發行

不許複製

編輯所 東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
發行所 東京府荏原郡品川町品川四百十二番地

編輯所 東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
印刷所 東京府荏原郡品川町品川四百十二番地
發行所 東京府荏原郡品川町品川四百十二番地

顯本法華宗
管長大僧正

本多日生猊下新著

壹圓六拾錢（總布上製）
送料十三錢（天金兩入）

諡號勅賜 立正大師 記念出版

諡號勅賜 記念出版

著者卷頭に序して曰く、此の書は立正大師の人格と主張とを講明するに於て確かに其の要を得たるものと信ず、項目は緒言、經歷、人格、主義、主張、判教、教義、原理、實行、效果、警策の十一種に止めたり、若し讃仰士女、この書を精讀せば、必ずや立正大師の高風と慈教とに接して、感孚する所あらん、其は講述極めて平易なるも予が多年の研讀と衷心の信解とを披瀝したれば讀者の間に生ける立正大師即ち日蓮聖人の眞精神に感觸し得べければなり。云々……

發行所

東京本郷區三組町八拾番地
電話 下谷一八九七番
振替口座二五七八〇番

中央出版社

取次所

東京市外品川町妙國寺内
振替口座東京三五一九六番

大藏經要義刊行會

目次

| | |
|---------------|---------|
| 年 頭 言 | 本 多 日 生 |
| 立正大師諡號宣下に就て | 本 多 日 生 |
| 日蓮主義より見たる無量義經 | 井 村 日 成 |
| 雪 割 草 | 國 友 日 斌 |
| カリガリ博士 | 古 田 昂 生 |
| 記 事 | |
| 法華經要文講義 | 本 多 日 生 |

第廿七年一月號



統